

---

# **学園默示録～転生者～**

シュヴァルツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園黙示録～転生者～

### 【Zコード】

N67870

### 【作者名】

シユヴアルツ

### 【あらすじ】

一人の少年はある日、突然神様と出会った  
そこで、いろんなチートをもらえた  
少年はその力何のために使うのか?  
今、始まる・・・

## あいさつ

こんには作者です。

今回は別物シリーズとして学園黙示録に挑戦してみたいと思います  
まだ、恋姫無双の方も完結していませんが、なんとか書いていくの  
でそっちの方もお読みください

また、主人公は最強シリーズでやつていきたいと思います。という  
よりも他のシリーズで書くことが

難しいんです。でも、機会があつたら挑戦してみようと思つます。  
ですので、どんどんお読みになってください。

また、感想の方も書いてくれると嬉しいのでお願いします。

## キャラクター紹介

小田原大和

突然、神様に転生させられた少年でこの物語の主人公である  
平野コータと同じ軍事オタクである

神様

大和を転生させた張本人で  
暇つぶしで大和を殺し、転生させたが何かと世話をしてくれるいい  
人でもある

小室 孝

本来の学園黙示録の主人公である

宮本 麗に振られてから無意味な時間を過ごしている

宮本 麗

孝と幼馴染で想い人だった人物。

今は、孝の親友と付き合っている

毒島 洸子

剣道部の主将で全国大会も優勝しているすごい人  
チームの中でサブリーダー的な人  
(作者はこの人が大好きである)

平野コータ

主人公と同じ軍事オタクで実銃も使つたことのある少年  
銃のこととなると目の色が変わる

高城 沙耶

孝たちと同級生で高飛車のお嬢様だが知識の方は一級品である

鞠川 静香

藤美学園の校医で天然ボケキャラだが  
医学の知識は本物で他のキャラを助けることもしばしば

## キャラクター紹介（後書き）

以上で書いていきたいと思います

## 白い世界

小「う、うん?」

気が付くと白い世界が広がっていた

ただ何もない真っ白な世界夢でも見ていくかと思つた

小「なんだこれ?」

ただ、そういうしかなかつた。だつて他の表現しろって言われても  
無理!

? 「気が付いたよつじやな

後ろから聞こえたので振り向くと仙人の格好をした老人が立つていた

小「どちら様ですか? あとここはどこですか?」

? 「儂は、お前たちの所でいう神様じや、あと、ここは死後の世界  
じや」

小「は?」

思わず聞き返してしまつた。だつていきなり自分のこと神だとか言  
うし

ここは、死後の世界つて言つたけど頭大丈夫かこの爺さん

神「なんじや?」

小「いや、だつていきなしそんなこと言われても信じられないって  
いうか。頭、大丈夫？病院に言った方がよくなない？」

神「信じておらんとこり」とじやな。なりばこれを見よ

小「なつ！？」

驚くのも無理はない。こきなり、現れたテレビには死んだ自分の姿  
があつたからだ

小「どうことだ！？」

神「だから、わざわざから言つてあるじやる。お主は死んだと  
だが？」

小「だつて、事故とかそういうのに巻き込まれたって記憶はないん  
だが？」

神「当然じゃ、だつて儂が殺したんだもん」

小「なん・・だと？」

俺は殺された？なぜ？

まだ、新しいエーガン触つてねえんだぞ

小「どうことだ？」

神「うむ、ずつとこの世界でいたんじやが、暇でな誰かを殺して第  
二の人生をおへらそうと思つた」

小「暇つぶしで俺は殺されたのか！？」

神「まあ、そう怒るでない」

怒るわ！だって何の理由もなしに殺されるなんてたまたまんじゅ  
ない！」

神「あまり、怒るな。短気は損氣じゃぞ？」

小「だつたら……」

神「最後まで聞け。何も地獄などに連れて行くつもりはない」

小「じゃあ、どうするつもりだ？」

神「転生じゃよ」

小「転生？それってよく一次元創作にててくるあの？」

神「そう。それじゃ。そこで、お主に問いたい。どこの世界がいい  
？」

小「無論、学園默示録で」

神「そんなとこに行くのかの。死亡フラグ満載の」

小「ああ、ゾンビを銃で撃つのもいいんだが……」

神「だが？」

小「何より、毒島汎子さんがいるのがいい！」

と興奮しながらいった

神「ふむ、人間界でいうファンと書かれてやつか」

小「そうぞう。」

神「場所は決まった。次に何か付けたい能力とかあるか?」

小「つまり、チートってこと?」

神「簡単に言えばそういうことになる」

小「そうだな。じゃあFATEのギルガメッシュのゲート・オブ・バビロンとアーチャーのアンミコテッドブレイドワークスの固有結界を何でもありで」

神「分かつた」

小「後、メタルギアのじゆぐらいかな」

神「そんなに少なくていいいのかの?」

小「あ、あと無限金庫なんてものはあるの?」

神「あるぞ」

小「じゃあそれも」

神「承知した。これぐらいかの?」

小「ああ、十分だ」

神「では、あのゲートをくぐれば向こうの世界じゃ気お付けていくのじやぞ」

小「大丈夫、大丈夫。心配してくれてありがとうな」

そつひつて俺はゲートをくぐった

## 主人公設定

性別 男

身長 174?

性格 親しい人や友人には温厚で優しいが、氣に入らない奴・嫌いな奴は徹底的に嫌うタイプで最悪の場合、殺しかけることさえある

趣味 ゲーム サバゲー 軍事関係に関する事を収集すること

特技 射撃 機械の修理 ピッキング 刀鍛冶

銃スキル

銃類のものはすべて熟練の兵士並みに扱える

ゲート・オブ・バビロン改

ギルガメッシュの使っていた物を改造して銃類も出せるようになっている

尚、魔力は無限になつてゐる

無限金庫

金をいくら使っても減らない金庫

アンリミテッドブレイドワークスの固有結界

アーチャーの固有結界を何でもアリにさせた

## 格闘技

世界各国の武術の良いところだけを合わせた格闘ができる

CQC

ザ・ボスやスネークが使う近接近格闘技を最高の物にした

また、FATEのキャラクターの宝具も扱える

## 主人公設定（後書き）

どうあえずこんなもんかな？

また、後になつたら新しいのを出す予定ですが決まっていませんので  
要望とかありましたら言ってください

## 新世界の生活

小「んっ」

目が覚めると目の前にあるのは・・・

小「知らない天井だ・・・」

なんてくだらない冗談をしてる場合じゃなかつた。まずは、状況確認つと

ベットから降りてすぐ近くに机があつた。その上に手紙があつた

小「なんだ?」

手紙を広げてみる

神「この手紙を見ているということは起きたということじゃな。こ  
こは、原作開始の一年前になるな。それだけあれば準備ができるじ  
やろ?主人公たちがいる藤美学園には転校生という形にしてあるか  
ら心配しなくてもよいぞ」

小「なるほどね」

それだけの期間があれば準備もたやすいということだ。それに、根  
回しも完璧じゃないか  
さすがだぜ神さんよ

神「追伸、能力の方はもう使えるようにしてあるから確認してくれ。

それと、家の方はお前の物だから好きに使ってよいぞ。後、分から  
ないことがあつたら、念じてくれればいつでも応答するぞ」

小「ほづ、この家は自由に使つていいのか

家の周りを見ると普通の一軒家であった

小「とりあえず、家の方は後回しがいいか。先に能力確認しつくか

までは、ゲートオブバビロンを開いてみるか

小「ひらけ・・・

と言つた後、後ろを振り向くと・・・

小「おお・・・・

そこには、無数の武器が浮かんでいた。剣から槍まであり、要望通  
り銃までちゃんとあつた。

小「アニメとかで見るのとはわけが違うな

とりあえず、ゲートの方はOKつと

小「次は・・・

固有結界でも発動させますか

小「I am the bone of my sword.  
体は剣で出来ている)

すると、背景が巨大な歯車が回っていた

小「チートだなこりや」

自分でやつておいて何言つてんだか

小「とりあえず、こんなもんかな？学校は明日からか準備しこい」

そういうて明日の準備を開始した

（翌日）藤美学園にて

先「え～今日はみんなに転校生を紹介したいと思つ」

男「先生！女の子ですか？」

先「残念だが違つ」

男「シヨボーン」

先「じゃあ、入ってくれ」

ガラガラ・・

小「初めてまして、転校生の小田原大和です。宜しくお願ひします。」

ザワザワ・・

小「？」

なんだ？妙にざわついているな。おかしかったかな？特に女子がざわついている

実は、違う。本人は気が付かないようだが顔が中性的なのがきれいに見えるのだ

先「ほら、静かに、じゃあ大和君は孝の隣についてくれ」

小「分かりました」

といつて指定された席に着いた

? 「俺、小室 孝よろしくな！」

小「小田原 大和です。よろしく」

それから、主要メンバーである。富本麗、高城沙耶、平野コータと友達になった

その後が大変であった。他の女子から質問攻めされた

内容的には「彼女はいるの？」などである

放課後、孝が部活動の方を案内してくれた。

俺は、真っ先に行きたい部活を案内してくれと頼んだ

孝「剣道部？」

小「うん、昔じこちやんから教えられたのをずっとやつてきたから」

孝「へー、すゞいな」

小「そうかな？」

本当はそんな理由じゃないんだけどね～

やつこじてるひたちに剣道場についた。中からは竹刀のぶつかり合  
う音が聞こえた

小「いじっく」

孝「ああ、「

と、話してゐるうちに一人の女性が現れた

? 「うちに何か用か?」

そう、この人こそが剣道部主将、毒島冴子である

小（冴子さんキター—————）

孝「あつ、1年B組の小室孝です。いっしが・・・」

小「小田原大和です。よろしくお願ひします」

冴「ああ、2年B組の毒島冴子だ。して何か用か?」

孝「はい、この子が剣道部を見たいって言つもんですから」

冴「ほひ、小田原剣道はやつた」とあるのか？」

小「はい、小わこ頃じこちやんに教えてもらいました」

冴「そうか、では私とやってみないか？」

小「いいんですか？」

冴「ああ、」

その後、冴子さんと一試合交えた。結果は俺の勝ちでした。なんで  
かつて？

そりゃあ、自分のチー…じゃない、努力と運の結果さ。

そしたら、冴子さんに「剣道部に入らないか？」といわれたので了  
承しました。

帰るときに、冴子さんに「一緒に帰らないか？」と言われたので内  
心大喜びしました。

帰り道では楽しく話をしながら帰りました。笑顔が素敵です！！

しばらくしてから、冴子さんと一緒に帰っています。毎日がハッピ  
ーです

～その道中～

小「あの、冴子さん」

汎「なんだ？」

小「ずっと前から好きでした！付き合ってくださいー。」

汎「え！？」

汎子 side

小「ずっと前から好きでした！付き合ってくださいー。」

正直、驚いた私のような者に告白していくなんて  
だが、私もこの子に惹かれていた。初めてあつたあの時から・・・  
だから私は・・・

汎子 side out

どうだったのかはよく分からぬ。でも、自分の思いをぶつけた  
後は、返事のみだ。

・・・・

しばらく、沈黙が続いた。そして・・・

スッ

小「え？」

手を握られていた

涼「こんな私でよければ付き合おう」

小「やつたゞ」

マジでー?やつたーーー!憧れの涼子ちゃんと向き合いつことができ  
るー

そのまま、手を握りながら帰つて行つた

## 新世界の生活（後書き）

こんな風に書きました。  
いかがでしょうか？

## 原作開始！

冴子さんと付き合って始めて一年くらいたつた。

あれから、みんな、進級したのだがなぜか麗だけが留年になっていた。

詳しく調べると、教師の紫藤という奴が裏で糸を引いてることが分かつた。

バスで会つた時には後悔させてやる。フフフ

俺は、2年になり冴子さんは3年になった。付き合つてから最初は大変だった

いろんな人から、「どうやって、口説いたんだ！？」と質問攻めされた

それは、冴子さんも同じであった。だが、今となつては「剣道夫婦」といろいろな愛称で呼ばれるようになつていた。

だが、そろそろ原作が開始する。そのために一年間準備をしてきたんだ

まず、こっちの世界でほぼすべての免許を取得した（裏で根回しました！ブイツ！）

その後、家を改装して要塞みたくしました地下4階から、武器庫、食糧庫、車庫、弾薬庫を作り冴子を家に呼んだときは「戦争でもす

る奴か？」と言われちゃいました。

あと、世界各国から、軍用車両を貰い取りました。

どうやつたかって？」ううとひ、無限金庫があるんですよ。おもれですか？

まあ、ともあれ戦闘準備は整つてます。

いつでも来いってんだ

すると・・・

ガラッ！

孝が入ってきた

先「小室！サボるだけじゃあ飽き足らぬ授業の妨害か！？」

だが、孝は無視して麗の方に近寄った。

孝「来いよ、逃げるぞ」

麗「ちよつちよとまつてよー何がビーフしたってこのよーへ説明してもらなきやー」

パン！

孝「いいから、来いー」

永「どうしたんだ、孝？」

孝「校門で教師が殺された。やばいぜ」

永「なつー？それは本当かー？」

孝「ほんのウソついてどうする？とにかく逃げるぞ」

そつこつて、教室を出て行つた。

しばらく沈黙が続いた。

しかし、ここにいてもしょうがない。行動開始するか

小「先生」

先「おっおっ。なんだ？」

小「小室達を連れ戻します」

返事を聞かず出て行つた。

小「とりあえず、保健室に行くか」

そつこつて、保健室の方に足を向けた

しばらくしてから・・・

ア「全校生徒に連絡します！只今、校内で暴力事件が発生しました！すぐに避難してください！繰り返します全校生徒に連絡します！」

只今、校内で暴力事件が発生しました！すぐに避難してください！  
ぐわっ！やめろ！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！ぎゃあ—————  
——ガツ

その後で生々しい食る音が聞こえた。

また、沈黙が続く、チョークの転がる音が聞こえるがその直後、落ちた。

生「うわ————！」 もや————！」

落ちた音をきっかけに全校生徒が逃げ惑つ。

我先に逃げようとして前にいる生徒を蹴飛ばしたり、転んで他の生徒に踏みつけられて亡くなっている生徒がいる。

しかし、その死に方の方がましかもしれない。この先にある地獄と比べれば・・・

ともかく、保健室に急がないと！

# 恋人との再会

孝子傳

麗と永と三人で教室を出た後、教師が校内放送で避難命令を出した。しかし、その教師も奴らの餌食となりマイク越しに生々しい貪る音が聞こえてきた

一瞬、沈黙が走るがその直後・・・

「……………」

と生徒が廊下に溢れかえった。

そこで、教室棟からではなく管理棟から屋上へ目指すこととなつた

Sideoout

俺は、今保健室の近くの廊下に来ている。廊下には食われたであろう生徒の死体がありその周りに奴らが群がつていた

小学校保健室までは50メートル位か・・・」

奴らの数は  
・  
・  
・  
5体

こんだけ狭いとさすがにやりずらいからあれで行こう

小  
I  
am  
the bone of  
my sword.  
体は剣で出来ている

「体は剣で出来ている」

そこで、出したのが一振りの日本刀である。この刀は姉妹剣で由緒正しいものだったとからしいがそんなのは関係ない使えるものを使うそれが、モットーだ

小「はあああああ！……」

そう言って、一番近い奴の首を跳ね飛ばした。その後なだれ込むよつに来たので二刀流居合で決めた。

ドサドサドサ――！

小「ふう、こんなもんかな？」

そして、保健室の扉に手を掛けた。

ガラツ！

？「誰だ！？」

小「待て待て、俺は人間だ。」

手を挙げながら入った

？「あつすみませんてつきり奴らかと」

小「気にすんな、所で名前は？」

？「石井と申します」

? 「私は～鞠川静香よ」

小「俺は、小田原大和。よろしくな」

石「あ！剣道夫婦で有名なあの？」

小「ああ、そうだ」

と自己紹介をしている時・・・

ガシャガシャーン！！

石「ヒー？」

小「下がっている」

そう言つて奴らの方に向くすると・・・

? 「はああーーー！」

ドカツ！バキヤ！

小「真打ちの登場か・・・」

ニヤリと笑いながら言つた

沢「大丈夫か？大和」

小「ああ、この通りピンピンだ」

手を広げながら言った

冴「そうか、良かった」

彼女もまた恋人に会えたことに一安心したようだ

しかし・・・

アアアアア

また奴らが来た

小「またか、しつこいね~」

冴「私達も人気者といつことか」

小「じゃあ、ひと慣れしますか」

冴「付き合つぞ。大和」

小「嬉しいね~なら、かつこいいとこ見せますか」

そう言いながら奴らに切り込んでいった

## じつあんず職員室へ

保健室から出た俺達は今後の計画を決めることとした。

小「どうして脱出すの？」

冴「どうあれ、歩いては無理だな」

石「どうですか？」

冴「校庭にわんさかと奴らがいた。これまで、捕まつてやられたのがオチだな」

小「そうだな」

鞠「じゃあ車で出るひつひつのは？」

小「そうだな。それが一番だな」

鞠「じゃあ、決まりね。職員室へ行きましょう」

冴「なぜだ？」

鞠「だって、車のキーとかは全部あそこに置いてあるんだもん」

冴「面倒だな」

小「そう言つなって冴子、もしかしたら他の生存者とも合流できるかもしないしな」

汎「そうだな」

「そう言って職員室を田舎」とした。

職員室付近

やつと、職員室付近まで来た。すると・・

全「！」？」

急いで悲鳴がした方に走ると、電動ドリルで奴らの頭を貫く高城の姿があつた

「……せーせーせーせーせーせーせー」

まだ他にも奴らがいたので安全確保に向かった。

小「冴子は左を頼む！孝と麗は真ん中を頼む！俺は左の奴をやる！」

汎・孝・麗「おひー」

「はああ！！！」

ドカツ！

麗「やあやあーー！」

グサつ！

孝「おーーー。」

バキヤ！

小「行くぜ！」

ザシユツ！

一瞬にして勝負は着いた

小「ふう、」

一息入れた高城の方を見ると

汎「もういい、十分だ。」

汎子が慰めていた

小「汎子、いい母親になるな」

小さな声で言った

それから、俺達は職員室に入り出入口をバリケードで覆った

軽く自己紹介もした

孝「さて、これからどうするか・・・」

麗「とりあえず、テレビで情報を集めましょ。」

といつてテレビをつけた

といつあえず、みんなの武器を用意するか・・・

麗「うそ・・・」

孝「どうした? 麗」

みんなでテレビを見た

テレビでは、自分たちの町だけじゃなく世界中に広がっていることが分かった

途中で冴子がリモコンで他のチャンネルを回した。一度中継なのかアナウンサーがしゃべっていた

ア「埼玉県では一万以上の死傷者が出ています。知事による・・・」

パン! -

ア「! ?、発砲です! ついに警察が発砲を開始しました! でも、一体何に?」

といつた後、アナウンサーの悲鳴がして、そのまま砂嵐になつた

ア「何か問題が起きたようです。ここからはず、スタジオよりお送りします。みなさん可能な限り屋外には出ないでください」

ダアン！

孝「それだけかよ！…どうしてそれだけなんだよ…」

高「パニックを恐れてるのよ」

麗「今更？」

高「今だからこそよ。恐怖は混乱を呼び、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして、秩序うが崩壊したらどうやって、動く死体に立ち向かうというの？」

その他のチャンネルでも同じ状況だった。アメリカはホワイトハウスを破棄、洋上に移動したという

孝「世界中で同じことが…」

口「そんな…朝、ネットで見たときはいつもどおりだったのに

麗「信じられない。たった数時間でこんなことになるなんて。きっと元に戻るわよね」

高「なるわけないし」

孝「高城、そんな言い方はないだろ」

高「パンデミックなのよ仕方ないでしょ」

鞠「パンデミック」

小「感染爆発のことだな」

冴「大和」

孝「所で、大和」

小「なんだ？孝」

孝「後ろにあるのは何だ？」

小「ああ、これ？これはね——」

大和の後ろに有つた物とは？・・・

ひとつある職員室へ（後書き）

次で、学園を脱出します

## 職員室にて

そこに、「あつたのは大量の武器があつた

孝「どうしたんだ?」これさつきまで、持つてなかつたよな?」

小「ああ、これは俺の特殊能力だ」

高「特殊能力?」

小「ああ、俺にはいろんな武器を出せる。いろんな風にな

ヌオン

全「…?」

後ろにバビロンを出した

孝「どうして?」とだ?「これならもつとはやく…」

麗「そ、うよーなんで今まで黙つてたのよー?これなら永が死ぬことなんてなかつたのに!」

麗は大和に詰め寄つた

小「待つた。ちゃんと理由を言わせてくれ。この能力はこの事態が始まると前に誰かに話すと未来が変わってしまうんだ悪い方向に…」

麗「…?」「あんなさい…」

小「いいつて、俺だつて早く話したかつたが悪い方向には向けたくない  
なかつたからな」

汎「大和・・」

小「すまないな汎子。お前にも黙つてて」

汎「氣にするな。私はお前の恋人だぞ？ 恋人を信用しなくてどうする？」

小「・・・ありがと」

心が軽くなつたような氣がある。ほんと、いい人だよあんた

孝「とりあえず、どれが使えるのか教えてくれよ。大和」

小「ああ、」

そして、武器を全員に渡しながら言つた

小「孝、お前にはハンマーとマガを渡しておくれータ、使い方を教  
えてやれ」

コ「分かつた」

といつて、離れた

小「麗は青龍偃月刀と孝と同じマガを渡しつて」

麗「ありがと」

小「高城はアラカルサーを渡しておへ後、サーベルも渡しておへな

高「・・・ありがと」

小「どうした?」

高「あんた、何者? わつきの能力とい」

小「俺は何者でもないよ。この能力だって特典みたいなものだし」

高「そう・・・今は信用してあげるでも、裏切るまいなり・・・」

小「ああ、構わず俺を殺せばいい。だが、裏切ることはない俺は、みんなを信用してるからな。もちろん、お前のことは・・・」

高「つ、分かったわ」

そう言つて離れて行つた

小「石井はこの槍を使え後、じじも、「

石「あ、ありがと」

小「鞠川先生にはこの銃を渡します

鞠「でも、私、銃使つたことないから」

小「自分の身に危険が来た時にだけ使ってください。後は俺らがフ  
オローしますから」

鞠「・・分かったわ

小「冴子にはこの長曾根琥徹を渡しとくよ、それと小刀もな

冴「ありがとう。なあ大和」

小「なんだ?」

冴「正直、さつきの話私にもできなかつたのか?」

小「ああ、それで悪い方向に向かつたら最悪お前を失つてたかもし  
れないからな。可愛いお前を・・だから、黙つてた。本当にすま  
ないと思つてゐる。」

冴「ツ／＼そ、そうか。それならば仕方ないな」

照れてる姿もかわいいな～今すぐお持ち帰りしてもいい?

え?だめ?

大和は、キュンキュンしていた

コ「大和、こつちは終わつたよ

小「おう、サンキュー、コータにも武器を用意したぞ最高のな

コ「マジ?--?」

「一タよ田<sup>だ</sup>がやばいぞ

小「ああ、見てくれ！」

ジャーン！

小「釘バット～」

「肉弾戦は無理です～」

小「おおっどじめんじめん、間違えた」

「ふう～びりへつした

小「お前にM4とその下に付けるグレネードランチャーを渡そ  
う」

「いやっほーーー！」

マジで飛び跳ねてる相当喜んでるな

小「後、500も渡してくれな

こいつは、モンスター級のマグナムだがコータなら大丈夫だろう

小「そんで、俺が

バレットライフルにランチャーを装備した奴とM60軽機関銃で援  
護型だ

これなら、フォローに回れるだろ？

小「よし、もう少し休憩したら」の学園からおもいがばだ

汎「そうだな」

孝「出るときはどうする？」

鞠「やつせ、大和君と話して車で出ることになったの。だから、私の車で……」

汎「全員を乗せられる車なのか？」

鞠「うう……」

汎「遠征用のバスはどうだ？ 壁にキーがわざわざつるよつだが」

コ「バス、あります」

小「とりあえず、それでいい」

ともかく、休憩だ。それからでいい

## 学園からおそれいぢー！

少しして、俺達は、行動を開始した。

脱出経路としては正面玄関から一直線にバスに続いていたのでそこから向かうこととした。

（職員室前）

ガラツ！

アアアアア！！

孝「行くぞ！」

全「応！」

ダン！ダン！

バタツバタツ

途中、教室から出てきた奴らを始末してなんとか、正面玄関付近まで来た。

その時！

? 「キヤアアアアアーーーー！」

全「ーー？」

急いで、声のした方向に向かうと複数の男女が奴らに囲まれていた

男「くつ」

女「卓三」

卓「下がつてろ」

アアアアア！！

ダン！ダン！

バタバタ

孝「おらー！」

ドカーグシャ！

汎「はあ！」

ザシユ！

一瞬で片がついた

女「あ、ありがとうござる・・・」

汎「大きい声を出すな。奴らが気づく、？まれたものはいるか？」

女「いません。いません」

麗「本当みたいよ彼女たち」

孝「これから、脱出するが一緒に来るか?」

男「は、はい」

それから、なんとか玄関前までたどり着いた。

孝「わんさかといるな」

高「連中、音にだけは敏感なのよ。だから、隠れる必要なんてない  
じゃない」

孝「高城が証明してくれよ」

高「ツ…」

冴「しかし、このまま校舎の中を進み続けても襲われた時に身動き  
が取れない」

麗「やつぱり、玄関を突き抜けるしかないのね」

冴「誰かが高城君の説を証明しなければならない」

小「俺が行くよ」

孝「どうしてだ? それなら、俺が…」

冴「私が行くぞ。大和」

小「冴子はもしもの時のために残つてくれ」

麗「じゃあ、なんで?」

小「償いかな?」

麗「償い?」

小「やつきのー」と、正直騙してたのは悪いと思つてる。でも、満足はしないだらうから行動で示せつてよく親から言われたかを…。

「

冴「大和…・・

小「悪いな冴子。少しばかり俺のわがままに付き合つてくれよ」

冴「心配するな。私はいつでも君の味方だ」

こんな人を恋人にできて俺つて幸せもんだなあ

なら、悲しませないよつこしますか

小「じゃ、行つてくる」

冴「ああ、気お付けてな」

そつ言つて俺は静かに階段を下りた

アアアアア

セーヒヒョウで奴らが動き回つてゐる。

やつぱり、田とかは死んでるのか？

なら・・・

ガーン！-

近くにあつた靴をロッカーの方に投げた  
すると、音のした方に奴らが動き出した

俺は、みんなに合図を送り玄関の扉を静かに開けた

その時だつた！

カアアン！

皆が階段を下りてる時一番後ろにいたさすまたを持った少年が階段  
にぶつけてしまつた！

孝「走れ！」

孝の声で階走り出した。

高「どうして、声を出したのよー玄関の奴らだけ逃げてやつ過い  
せたかもしれないのにー！」

ド「オオオオオン！

俺は高城に近づいてる奴を倒して言った

小「今の音じや あ学校全体に響いてるよ」

高「つ・・・」

小「だから、話してる暇があるなら走れ！後、タオルを持った少年  
！戦おうとするなバスまで走れ！」

男「は、はい！」

そういうて、なんとか皆バスまで走り切った

殿は俺と冴子でやっている

冴「大和…全員乗つたぞ」

冴「デヂヂヂヂヂヂヂヂ…！」

小「冴子が先に乗れ！すぐ行くから」

冴「分かった！」

そつ言つてバスに乗り込んだ

俺も周囲の確認をして乗り込んだ

小「先生！だし「待つてくれ！」」

声のする方向をみると数人の生徒がこちらに走って来た

孝「誰だ？」

汎「三年A組の紫藤だな」

麗「紫藤？！」

鞠「もう出せるわよ！..」

孝「もう少し待ってください！」

麗「あんな奴助ける必要ない！死んじゃえばいいのよー。」

孝「落ち着けってどうしたっていうんだ！？」

そう言つてゐるうちに紫藤達が乗り込んできた。

孝「もう行けます！」

鞠「いっくわよー」

ボン！..

高「校門へ向かって！」

鞠「分かってるー！」

だが、その手前で多くの奴ら化した生徒がいた

実際に見ると気持ち悪いな～

鞠「人間じゃない・・・もう、人間じゃない！！」

と言つてアクセルを思いっきり踏んだ！

そして・・・

ガシャーン！

門を突破し見事学園から脱出に成功したのだ

俺は、一先ず安心した。

俺の弁護士を出すなー

学園から脱出した俺達は町に向かって走っていた

ソーリで、金髪不良少年が文句を言つてきた。

金「だからよーーなんど、俺達まで小屋達に付きてやねんがやならないんだよー。」

と言つてきた。ソーリいう状況だと他の奴も賛成しかねないんだよ～

男「そりだよー！救助が来るまでソーリかに隠れてこよひよ。わざわざのハンドルとか」

なんだ？状況を把握してないのか？」の馬鹿どもせ・・・

と言い争つてみるとバスが急に止まつた。

鞠「いい加減にしてよーー」れじや、運転なんて出来やしないー。」

もつともなこと言つた

金「んだよーー何見てんだーーやつらが何つのかーー。」

あ～本物のいわむすべな一遍もかのめじてやれりか？

冴「なひざ、無さじうつしたいのだ？」

冴子が質問を掛けてきた

金「気に入らねんだよー！」いつがー！」

孝を指さしながら言った

孝「なんだよ？俺がいつ、お前に言ったよ？」

金「んだとー？」いつー！」

と黙つて孝を殴りうつと近寄つた

だが・・・

小「ふん！」

ドカッ！

金「ぐあーー？」

小「いい加減にだまつとけやこのクソ餓鬼が」

金髪を睨みながら言った

パチパチ

紫「いや～ずいぶんといい物を見せせてもらいました。」

てめえに言われても嬉しかあねえんだよこのクソ野郎が。

紫「しかし、私が言った通りここにはリーダーが必要といふことが

分かりますねえ」

高「で？候補者は一人つきりて言つ訳？」

紫「私は教師ですよ。高城さん。そして、皆さんは生徒、ここには、絶対的なリーダーが必要なのです！どうですか？皆さんは皆さんはを安全にしてあげられます！」

そうこうと、後部座席のほとんどの生徒が立ちあがって拍手した

あれじやあまるで、宗教だな・・・怖い怖い

麗「嫌よ！そんな奴と一緒にいるなんてごめんよ！」

そう言って麗がバスから飛び降りた

小「孝！麗のあの状態じゃあ戻つてこない！一緒に着いてやれ！」

孝「わ、分かった！」

そう言って孝もバスを降りた。

そして、数分後違う道から路線バスが暴走しながら孝達の方に突っ込み横倒しになつた

孝達はその先のトンネルに逃げ込んだようだ

小「孝！大丈夫か！？」

孝「ああ、大丈夫だ！それよりほかの所で合流しよう！」

小「場所は？」

孝「東署に一時！無理なら明日の同じ時間に…」

小「よし、分かった！」

そう言つた後バスが爆発を起こした

俺は急いで皆のいるバスに乗り込んだ

小「静香先生！他へ回りましょ！」

鞠「え、ええ！分かったわ」

その場から離れて俺達を乗せたバスは大きな橋付近まで来ていた

冴「一時間に一キロってところか…」

小「これじゃあ進みようがないな。やっぱり、バスからは降りるか

高「そうね、大和の言つとおり他のルートから探すしかないわよね

鞠「皆バスを降りるの？」

小「ええ、そのつもりですよ。第一、紫藤達に付き合ひ理由はない  
からな」

鞠「じゃあ、私も連れてつて」

小「いいですよ。」「ータも一緒にいいだろ?」

口「もちろん!」

冴「私はいつも、大和と一緒にだ」

嬉しい」と言つてくれるね~喜んじゃうよお兄さん。

あ、今は俺が年下なんだっけ? まいいか

すぐに、行動を開始するため動いた

その時である

紫「おや、どうしたのですか? みなさん」「同じで一緒に一致団結して……」

高「お断りしますわ。紫藤先生?」

小「そうね?、元々目的が違うから付き合いつ義務なんてないからな

紫「そうですか。それは仕方ありませんね。なんせ、日本は自由の、  
国、ですからね。

ですが……あなたは残つていただきますよー鞠川先生?」

鞠「は、はい?」

紫「いいで、医師を失つのは大きすぎますですから……」

ダアン!~

セイヒで銃声が轟いた！

撃つたのはピータと俺である

紫「ひ、平野君と小田原君・・・」

小「なあ、とことん虫が良すぎねえか？あんた。後ろの生徒たちに何吹き込もうが関係ないがな俺らの仲間にまで手を出すつもりなら生きては返せねえだ」

俺はやばこへりこて殺氣を紫藤にぶつけた。普通の奴なら気絶するくじこに・・・紫藤はなんとか持ちこたえてるけど

紫「で、ですから私は、現状のアメリックをですね」

「こいつ、耳はつこいんのか？同じことを言わせるこじやあねえよ

もつー発がちこでめひつか？

小「じゃあ、質問だ。仮にお前がリーダーとなくなつた場合、まず、どうすみのへ？」

紫「そ、それは、ですね。まず、避難所に避難して安全を…」

小「はい、アウトへの世界に安全な場所はあるか？答えはノーだ。今の考へで行つたら確實に奴ら化してしまつ。そして、その考へはほとんどの同じだう」「ひひだらう

紫「へへ」

小「これでも、まだリーダーになるつもりか？やめとけやめとけすぐにお陀仏するぞ。そして、そんな奴に俺らの仲間を渡せるかつてんだ戯言は他でやつてくれ

小「それと、麗のことだが

紫「み、宮本さんがどうしたといふのです？」

小「なんで、留年したのか調べさせてもうった。糸を巡るとあら、びっくり議員の息子に辿りついた訳だ。どういう意味か分かってんだろうな……！」

そう言って奴の顔面を思いつきり殴った！

紫「グハ！」

ドサッ！

そこで、待つたは掛けない。追い打ちを掛ける

小「麗やその家族のこと考えたことはあるか？ないだろ？お前みたいな肩にそんな考えはないからな」

ドカツバキヤ

紫「ゆ・・る・・し」

え？何？聞こえない

小「よし、『一タ！手伝ってくれ！』アレ”を掛けるぞ」

コ「オッケー」

そして、一人で肩の体を持ち上げて叫んだ

—「ブレーンバスター！！」

ドッカーン

紫一  
わざああああああ

あら、氣絶しちやつたよ。まいいか

それじゃあ、

小一深子、ここは、俺とヨーハで殿を務める。お前たちは先に行け。

「承知した！」

そう言つて冴子、高城、鞠川先生は降りた。その後俺とコーダもバ  
スから降りてクソ野郎どもとおさらばした。

しばらく、歩いていて近くの橋に寄つた時バイクに乗つた孝と麗を見つけて合流した

小「これから、どうあるか。」

高「そうね、田もだいぶ沈んだし今田はもう少しで休みたいわ」

鞠「あつそれなら使えるお部屋あるわよ」

高「彼氏の部屋?」

鞠「ち、違うよ。女の子のお友達の部屋!いつも、仕事とか忙しいから鍵を預かって空気の入れ替えとかしてるの」

そこで、俺はなぜかエプロン姿の鞠川先生を想像してしまった。

汎「大和」

ビクツ!

小「な、なんだ?」

汎「今、想像しただろ?」

小「な、なんのことかな~?あ、あははは~」

なんで、この人は分かるの?ESSP使い?まさかね~

汎「女の勘だ」

小「や、やだな~俺はいつも汎子のことしか考えてないよ~」

三十六計逃げるが勝ちだ!

汎「ツ//-/そ、そつか」

頬を染めて可愛いねえ～お持ち帰りしたい

そういうやつをしていたら孝が鞠川先生を乗せて場所を確認した。

俺達も移動を開始した

## 一時の休憩の前に何か忘れてない？

静香先生の案内で先生のお友達のマンションへ移動した俺達  
そこで、ある事に気がづいた俺

小「あつそついえば・・・」

孝「どうした？大和」

小「ここの近くに俺の家があつたんだわ。忘れてた」

みんながズツコケタ

高「もう一・二して自分の家を忘れるのよー。」

小「いや～悪い悪い。この騒動のせいですっかり忘れてたんだった。  
じゃあ俺いつたん自分の家に戻るわ！ついでに武器とか持ってきて  
やるから」

冴「私も行くぞ。大和」

小「分かつた。後、コータも来いいろいろと手伝って欲しい」

コ「わかった」

そして、俺と冴子とコータの三人はおれの家に向かつた

といつてもマンションから数分離れた場所だが・・・

～自分の家～

数分後、俺の家に辿り着いた

家の周りは死体だらけであつた

汎「何があつた？」

汎子も戸惑いを隠せないでいた

小「あゝ大方、家に侵入しようとして返り討ちにあつたんだな」

口「防犯装置がなんかでも付けてるの？」

小「うん、まあといつても自動機関銃が付いてるだけだ」

口「それって、防犯つて域じゃないよ・・・」

小「そうか？」

確かに、一般の人から見れば要塞にしか見えない・・・

小「まあ、とにかく入るういろいろ準備しなけりゃあいけないしな」

汎「そうだな」

口「そうだね」

一行は大和の家に入った

～大和の家中～

小「よし、じゃあ汎子は先に風呂でも入ってこよ。そのままじゃ気持ち悪いだろ?」

汎子の服には返り血がどつぱりと付いていて、あまりよろしくない格好になっていた

汎「ありがとう。大和そーセーでもらう」「

やつ置いて風呂のまゝに向かつた

小「よし、一ータ俺らは武器、弾薬、車両の整備点検だ

「OK.」

そつ置いて地下室に潜り込んだ

～地下一階 車庫～

パチン!

電気を付けたすると・・・

「おおーーー?」

コーダが驚いた。無理もない世界各國の軍用車両が止められていたから

「『どうしたの…？』れ！」

小「ああ、オークションとかですべて落とした」

そこに止まっていたのは米軍のM1126ストライカーエイブ、ハンビー、日本の96式装甲車、高機動車、その他諸々と止められた

コ「M1A2エイプラムズまである。すごいよ！大和、やっぱり君と友達になれて良かった！」

と握手しながら喜んでいた。

小「でさ、とりあえずどれに乗り込もうか悩んでるんだよ。コーダ、どうすればいい？」

コ「え？ そうだね……とりあえず戦車は駄目だね。攻撃力はあるけど車幅と搭乗人数が明らかにオーバーしちゃうからね～次に、ジープみたいな軽車両もダメだね」

小「どうしてだ？」

コ「小回りは利くかもしぬないけど、装甲車やハンビーとかいったものの方もあるからね」

小「なるほどな」となると、装甲車やハンビーとかいったものの方がいいか～」

コ「そうだね、とりあえず、一台で十分じゃない？ 静香先生の所にも一台ハンビーがあつたし……」

小「そうだな、じゃあとりあえず」のM1126ストライカーでいいかな？」

口「そうだね」

「これで、車両は決まった。次は・・・

「地下二階 武器庫」

パチン！

口「うつひょー！！」

今度は踊つたぞ！？

小「お気に召したかな？」

口「うん！もう最高！..」

そこには、軍隊にも勝てるんじゃないや 아니いかつてぐらいの武器が勢ぞろいしていた

剣から槍、銃、はたまた大砲までが置かれていた

口「そういえば、大和・・・」

小「ん？どうした？」

口「いくつかは選ぶけど、どうやって持ち出すの？」

小「ああ、そんなことか。」  
「入れれば問題なかろう。」

ヒュウン

口「ああ～すっかり忘れてたよ」

小「しつかりして下わよ将軍～」

口「うむ～すまなかつたな～。」

と、なぜかほのぼのとしていた。

数十分後・・・

小「よし、いれぐらいかな」

口「そうだね。」

田の前の装甲車の中には弾薬と食糧を満載にした

武器類はすべて、バビロンのまゝに置いてある

小「じゃあ、俺、汎子を呼んでくるわ

口「OKー。点検とかしとくよ」

セツヒツヒー、一田「一タと別れた

（一階）

小「おーい、冴子ひつひ終わったぞ～」

冴「ああ、今すぐ行へく

小「早く来いよ～聞聞の方こいのな～」

～数分後～

冴「おまたせ」

小「おひつて服は変わつてねえな

冴「なに、元ひつで洗濯するか

小「そりが、じやあ出発するか

俺達は、家を離れて孝達のこむマンションへ向かつた・・・

## 静香先生のお友達の部屋

俺達はストライカーで家を出て、孝達のいるマンションに向かった  
数分で着いてしまった。

冴子は服を洗濯するため先に入った

俺とコーダも弾薬類をまとめてマンションに戻った。

小「今、戻ったぞ~」

女子たちは風呂に入ってるようだ。騒がしいが大丈夫か?

男子は部屋の捜索をしているらしい

口「孝達は上にいるみたいだね」

小「じゃあ、俺達も上がるか

そりゃ上がり上がった。

上がってすぐのロッカーで孝達は奮闘してゐるみたいだ

小「よつ孝、石井」

石「お、おかえり」

孝「おつお帰り、どうだった?」

小「ん~まあとりあえず武器の確保はできたよ。それより、なにしてるんだ?」

孝「ああ、このロッカーを調べてたら弾薬が出てきたから銃もあるかな?って思つてた」

口「あるね、絶対」

口「一タガニヤケながら言つた

小「とりあえず、開けてみよつぜ」

孝「そうだな。手伝つてくれ」

小「OK」

そつ言ひて三人で開けてみた

全「せーの一」

ガキン!

全「うわーー!」

ドサッ

孝「痛つててて、あつおい、二人ともー!」

小「う、うん?」

「「う~ん、はつ~?」 キラーン~!~

カサカサカサ

小「うお~?」

なんだ!~?「一タの今の動きは~?まるで、『キブコの速さだ~?』

この体のどにそんな身体能力が?

「やつぱり、あつた~」

「一タよ。今なら言えるが

お前は悪人になれる!~!

ガチャン!

「スプリングフィールドM1A1のスーパー・マッチか、セミオートだけど。まつM14シリーズのセミオートなんて弾の無駄使いにしかならないし。」

と一人で銃講義を始めてしまった。

お~い、帰つてこ~い。孝が茫然としてるぞ~

「マガジンは20発入る。日本じゃ違法だ、違法。クウ~」

と言つて次を取り出した

口「ナイツ S R - 25狙撃銃か！？いや、日本じゃあそんなの手に入らないから A R - 10を徹底的に改造したのか！？ロッカーに残つてるのはクロスボウ！ロビンフットが使つたやつの子孫だよ！バーネットワイルドキャット C - 5、イギリス製のクマでも殺せるクロスボウだ！」

孝「これは？」

口「それは！イサカ M - 3 フライオットショットガン！アメリカ人が作つたマジヤバな銃だ！ベトナム戦争でも活躍した！」

と銃講義がやつと終わつたか

小「気が済んだか？」

口「うん、ごめん取り乱した」

そして今、俺らはマガジンに弾を込める作業をしていた

口「小室も手伝つてよ～面倒なんだ弾を込めるのって

孝「それを言つなら大和だつて」

口「ああ、大和は今やつてるよ。ほひ

と指をした方向をみると、大和はものすごい勢いで弾を込めていた

孝「どんな速さだよ・・・」

小「ん?なんか言つたか?」

孝「いや、それより、二人ともニアソフトガンで勉強したのか?」

二「まさか、実銃だよ」

孝「二人して本物持つたことあんのかよ!?」

コ「僕は、アメリカに行つた時、民間軍事会社ブラックウォーターに勤めていたインストラクターに一ヶ月教えてもらつたんだ。元デルタフォースの曹長だよ!」

小「俺は、武器を買い取る時、武器会社の社長と馬が合つてね。すっかり意氣投合して教えてもらつたんだ」

孝「二人とも、その方面だけは完璧だな・・・嫌われなくて良かつたよ」

二「あははは~」

俺は先に弾込めが終了したので見張りをすることにした。

## 街の状況

今、俺達、男子陣は交替で見張りをしている

夜だから、はつきりと見えないがよく見ると所々で煙が上がっているのが見えた

時折、銃声が聞こえたり、悲鳴が聞こえた

孝「ひどいな」

双眼鏡で御別橋の方を見ていった。

双眼鏡で覗いてみると橋の中央を封鎖して反対側へ行けなくしているようだ。

奴らがいる方は地獄の黙示録に出てきそうな場面であった。

口「ん？」

孝「どうした？」

口「テレビ付けてみて」

と言われてテレビを見た。

丁度、橋付近の映像が映し出されて、集団で抗議を行つてゐる様子が  
出た。

「我々は、政府の殺人病に対しても」

ア「たつた今、橋を封鎖している警察に対してスプラッシュコールを目的とした。団体が出てきました」

その内容は、この騒動が日本とアメリカ両政府が共同して作った生物兵器が漏れてこの事態を起こしたと言つてゐるらしい

なんとも、馬鹿馬鹿しいことだ。要は現実を見たくないって言つてゐるようなもんじゃねえか

孝「殺人ウィルスってなんだよ！？人が死んで動き回るっていう理屈、科学的に説明がつくわけないだろ！？」

口「ことは連中、設定マニアかな？」

小「ただ単に、現実を見たくないってことだろ」

と言つて再びテレビの方に視線を映した。

警官が一人出てきて、立ち退きなさこと命令しているようだ

だが、メットのおっさんは立ち退くぞ！と逆に帰れコールを始めた

後ろの連中も繰り返し帰れと叫んでいる

警官が独り言を始めたと思つたら、いきなり、銃を取り出しへットのおっさんの眉間に突きつけた

そして・・・

パン！！

撃ち込んだ。

その後は、しばりへお待ちくださいこの画面しか出なくなつた

ピッ

孝「ひどーな」

「『どうせならなくなつて』

孝「すぐ」、動くべきか？

コ「ダメだよー明るくならないと出た瞬間にやられるとかも」

とデータが説明していると後ろから近づいて気配がした

俺は、慌てて退いた

小「よつと

「『ヒジー？』

？「うふ～ン

孝「わあー？」

？「い・む・ろ・く～ん んちゅ～

孝に抱きついたのは鞠川先生だった。しかも、今の服装がエロい！

どんなかつて？タオル一枚しか着ていないのだ！

おまけに、酔っている事も分かる。俺はそそくさと退散を開始した

孝「先生、酔つてるでしょ！？つて大和…ビニに行へー！？」

小「お、俺、見張りでもしていくる」

孝「ちよ、待てって！逃げるな～裏切り者～！」

孝の悲痛？な叫びを無視してベランダに来た

しばらくするとコーラーが出てきたが放心状態だ。

・・・中で何があったかは聞かないようにじよつ

コーラーと交代して、俺はキッチンの方に来た

小「うおー？」

そこで見たのは裸エプロンをしていた冴子の姿だった。

冴「ん？おお、大和かどうした？」

小「お前な～その格好はないだろ！」

冴「仕方ないだろ。合づ服がなかつたのだから

俺は冴子に抱きつきたながら言った

小「やうこ'つのは、俺と一人つきのときにしてくれよ」ぼんやり

冴「～～～～～～～～

冴子はめつちや照れた。

小「じゃあ、もうちょっと見張りしてくわ

冴「あ、ああ、気お付けてな」

小「おひー。」

～ベランダ～

また、ベランダに戻ってきた。双眼鏡で覗くと所々で生き残りが闘っていた

御別橋の方は・・・あちゃ～さうにうぞこことになつてゐるな

ブルドーザーで突っ込んだあとまた、バリケードを作つて今度は無差別に発砲してゐるようだ。

奴らと一緒に住民も撃たれていった。

この惨劇はいつまでも続くのだろつかと心の中に思つてしまつた自分がいた

街の状況（後書き）

ついに、あの親子が！？

あります親子を救助せよー

あれから、また見張りをしていた。

街の状況はひどくなる一方だ。

孝「くそ、ひどすぎるー。」

口「小室ー。」

孝「なんだよ?」

口「撃つヒビツあるつもつなの?」

孝「決まってる。撃つてみんなを・・・。」

小「それは、無理だ。孝」

孝「じうじてだーお前のその力があるならなおれりー。」

小「おいおい、俺だつて人間だぜ? そんな風に動いていたらあつと  
いつ間に奴らに囲まれてお陀仏さ」

そして、電気を消しながら言つた

小「そして、すべてを救う力など俺たちにはない。生者は光を求めて群がつてくる」

孝「大和はもう少し、同じ考え方だと思っていた」

小「勘違いするな。誰もがこんな状況を好きだとは言っていない。  
ただ、この状況に慣れておけといふことだ。だが・・・」

孝「だが？」

小「救いたいといふなら救え、それがお前の本心なんだろう？」

孝「・・・ああ！！」

孝はそう言って、双眼鏡で見た

俺も、双眼鏡で見た。

あちらこちらで生存者が助けを求めてるがどの家も助けようとまじなかつた。そして、外の生存者は奴らの餌食となつた。

そんな中・・・

小「ん？」

ふと、目に止まつた親子がいた。一人は庭のある家に助けを求めた。

俺はバレットライフルを構えて見ていた。

中に入れてもらえないのか。父親がバールを大きく振りかぶつて叫んでいた。

そして、中から要請があつたのか、ほつとした様子だつた。

しかし、中から出てきたのは自家製の槍だった。

それに気づいた俺は迷わず引き金を引いた

ド「ーーーンーー！」

見事に槍の方に当たり槍は折れてしまった。

だが、親子や中の住人には何が起きたか分からず止まっていた。

中の住人は扉を閉めてしまつた

俺はすぐに行動を開始した。

小「孝！」「ここからすぐの所に家がある。そこに生存者がいる。その人たちを救つて来い！俺とコータはここから援護する！」

孝「わ、分かつた！」

そう言つて孝はバイクのある方に行つた

コ「大和」

小「なによ？」

コ「救わないんじゃなかつたの？生きるためにすべてを見捨てるんじゃないなかつたの？」

小「ああ、そのつもりだつたが、どうも性分みたいだ」

口 「なるほどね」

ニッコリと「一タは笑つた。

数分後、孝がマウンテンバイクで飛び出していった。

俺らは叫びながら構えた

口・小「ロツクンロール！」

ダン！ダン！ダン！

ドオン！ドオン！ドオン！

二人で銃声のオンパレードを開始した。

孝は見事、目的の場所に辿り着いたみたいだが道路の方が奴らで覆い尽くされていた。

口 「どうする？」

小「これは、さすがにバイクじゃあ無理だな。まあどうしちゃう・・・」

その時、後ろから声がかかつた

?「平野、小田原」

口「高城さん」

小「高城か」

と振り向いた瞬間、衝撃を受けた！

なぜかつて？

静香先生が裸も同然で立つていたら驚くわ！

口「し、静香、先生！？」

鞠「はあ～い」

とバックを持ち上げた。

おいおい、この小説18禁になるぞ

高「今すぐ、準備して！こんな騒ぎを起しちゃおいて、ここに困り  
れる筈ないもの！あんた達も準備して！」

口「は、はい！」

小「りょ、『解』

俺たちにはとても、キツイものだ

♪孝 side~

俺は、大和に指示されて親子かいの家に向かつた  
ついて、すぐに奴らを始末したが今度は逆に出れなくなっていた

因みに親子の名前は父親が稀里京、娘は稀里ありすちやんだ

孝「これから、じうするか

京「そうですね・・・」

あ「ねえねえ、お兄ちゃん、パパ」

京「どうした?ありす

あ「出られないの?」

孝「ああ、道路は奴らでいっぱいなんだ

あ「道路じゃないところばかりでいいんだ

孝「空でも飛べつてのか?あり

京「孝さん?」

俺はある所に目が行つた

～孝side out～

今、女子陣とコーナー、石井で脱出準備をしていく

孝と親子を救助した後はそのまま、川向ひわたるところ計画だ

しかし・・・

小「あの数はかかるだろ？・・」

双眼鏡で見る限り100体以上はいるんじゃあねえか？

と考えていると下からハイライトで照らされた。

どうやら、準備が整ったようだ、なら俺も行きますかね

～マンション前～

小「じゃあ、ストライカーの方に俺とコータ、後は孝とあの親子の救助車とする。ハンビーの方は残りが乗つてくれ」

高「分かつたわ」

小「じゃあ、出発！」

そつと乗つて乗り込んだ

あつす親子を救助せよー（後書き）

続きを次回に書きます・・・

## ありす親子を救助せよーー2

（孝 side）

俺は、今堀の上を歩いている。この事に気付いたのは、ありすちゃんの言葉だった

それを、ヒントにやつた

孝「京さん。大丈夫ですか？」

京「ああ、大丈夫だ」

しかし、ここつらひびこまでも西やがる。じつすれば・・・

（孝 side out）

俺は、ストライカーで孝たちの居る方に走らせていた。

小「コータ、どうだ？ 状況は？」

コ「見えてきた。奴ら、ウジャウジャいやがるよ」

小「マジか」

そつ言つて無線機に手を伸ばした

無線機はハンバーの方にも付けておいた

小「いや、ストライカー応答せよ」

高「なに? その軍隊方式は?」

小「いや、俺の癖なんだ気にしないでくれ」

高「そう、それより、前の状況は?」

小「ああ、ひどいもんだ。」

高「そう、小室たちは?」

小「ちょっと待つて。コーダ」

コ「えーと、あ、いたいた塙の上を歩いてる。すごいなあ」

小「だ、そうだ」

高「ええ! ? 塙の上にいるの! ?」

小「ああ、だがその方が効率がいい」

高「まあ、そうよね」

小「俺たちが突撃するから後ろで待つてくれ」

高「了解」

小「さて、コーダー衝撃に備えろ!」

「「オッケー！」

返事が聞こえたので思いつきリアクセルを踏んだ！

「オオオオオオ！！！」

「小「突撃」！」

ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！

車体の至る所で音が響いた！

そして、ドリフトしながら車体を横に向けた

（孝 side）

俺は、音の方に視線を向けると、なんと大和の装甲車が突っ込んできた！

そのまま、車体を横に向けた

孝「む、無茶苦茶やるな・・・」

ガパツ！

小「孝！早く来い！」

孝「む、無理やうなつて！」

これで、俺たちの生存が確定した！

／孝 side out／

俺は装甲車のふたを取つて叫んだ！

小「孝！早く来い！」

孝「む、無理やうなつて…」

そう言つてゆづくりだが移動を開始した。さて、援護してやらねばな

小「コータ、援護するぞー！」

コ「OK！」

そう言つてコータはM4で射撃を開始した

俺も”あれ”を出すか

バビロンから出したのはM2キャリバーである。

コータは気付いて興奮した

コ「そ、それは！M2ブローニングキャリバー！今、米軍で使われてる重機関銃だね！」

小「ああ、そうだ！そしてここにこつをここにつける。」

ガチャーン！

小「わあ、ショータイムだ！」

そう言つて引き金を引いた

... - - . - - . - - . - - . - - . - - . - - . - - .

小 ヒイ一ハ一！」

撃ちながら叫んだ

あつという間に近くにいた奴らはボロ雑巾になつた

そういうふうに、孝たちがついた

小一川向う行きの最終便だ！乗るか！」

孝 - もちろん!

そこで装甲車の上に着地した。

その後、稀里親子も乗ったので出発した。

うして、俺たちは一田を生き延びたのだ

今度は街の反対側へ・・・そして武器を新型を・・

無事にありす親子を助けた俺達は街の反対側へ行くため、移動して  
いた

（ストライカー 内部）

京「先ほどは本当に助かりました。私は稀里京、そしてこの子が・・  
・」

あ「稀里ありますー！さつあは本当にありがとうございますー。」

（「ははっ、本当に元気だねありますちゃんは」

京「それで、今はどこに向かっているのですか？」

小「今、街の反対側に出ようと思つています。川を渡河して、みんなの家族の無事を確認して無事なら救助して脱出しよつと思つています」

京「では、私たちも動向させてもらつていいですか？」

小「もちろん！、あつあと自分たちの仲間も紹介しますよ」

京「分りました」

そつと話をしていました

（御別橋付近）

橋付近は昨日見た時よりひどいものだった

小「ひどいな」

京「そうですね。私たちもここから逃げてきたのですが。良かった」

京さん達もここから逃げ出して逃げたようだ

小「とりあえず、橋の方は行かないほうがいいな」

孝「どうしてだ？」

小「考えてもみる。昨日、あれだけの騒ぎがあったのに、何もないわけがない」

「つまり、奴らが隠れてる可能性が高いってわけだ」

小「そのとおり、あんな所で囮まれたりしたら、いくらここでも耐えきれないからな」

とストライカーを叩きながら言った

孝「なるほど、でも橋が使えない感じがあまりよくな感じはないか？」

小「だから、川を渡河するつて言ひたのじやねえか

孝「？？」

「イマイチ分かつてないみたいだな。まつにんな常識が通用するのは軍隊のみ、だからな

口「小室、この装甲車にも後ろのハンバーにもビーチリとも水陸両用になつてゐるんだよ

孝「え? ビーチリもか?」

口「せう、エンジンがやられないよう設計してあるんだ。ただし、深いところだとさすが無理だけね」

小「コータの言つ通りだ。だから、深くない所を探しているわけだ」

そう、この車両にも後ろのハンバーにも水陸両用が付いてるのはいいんだが、深い所だとさすがに無理があるからな

小「とりあえず、先に休憩するか

口「そうだね、昨日から動きっぱなしだよ~」

と言つて腹を擦つた。そういうば昨夜から何も食つてなかつたからな  
俺は、無線機を取り出して後ろのハンバーに聞いた

小「こちあら、大和だ。誰か応答してくれ

汎「汎子だ。ビーチした? 大和」

小「ちょっと、休憩しないか? 動きっぱなしですかに腹が減つた

冴「なあ、一度いい、昨日弁当を作ったんだそれを食べよ」

小「マジでー? やつたゞ久しづぶりに冴子の手料理が食べられる~」

冴「フフッ 楽しみにしておけ」

小「おうー。」

そつまつて無線を切つた

そして、近くに河原があつたのでそこへ食べる」とした

小「それじゃあ

全「いつただきまーす」

各々好きなものを取り食べていつた

小「おおっ! の卵焼きつまい! 冴子のものだな

冴「よく分かつたな」

小「だつて、恋人の手料理だよ。わからない筈がないじゃん

冴「そうか、」

と言いつつ、嬉しそうな顔をした

それから、みんな食べ終わった

俺は、新しく武器をみんなに渡す」とした

小「よし、みんな新しい武器を渡すから来てくれ」

みんなが集まつた。

小「まず、孝だが、お前にはMP5を渡そう。後、サブでココーク  
を渡す」

孝「サンキュー」

小「次に麗だがお前にこの槍を渡そう。」

麗「赤い?」

小「それは、ある英雄が使っていた槍だ。名をゲイ・ボルグ」

麗「そんな代物をいいの?」

小「ああ、俺が持つてるより使つてくれた方がこの槍のためにもな  
る」

麗「分かつたわ。ありがと」

小「あ、後、サブとして、ベロック18を渡しておぐ」

麗「ありがと」

小「高城には、P-90とM93Rを渡しておぐ

高「ありがと」

小「石井はG3とGSAだ」

石「ありがと」

小「汎子には物干し竿と日本刀を渡しておく」

汎「ありがと、これは、もしかしてあの?」

小「ああ、小次郎が使っていたものだ。」

汎「なるほど、見事な出来栄えだな。大事に使わせてもらおう」

小「おう、使ってくれ」

小「京さんにはG36Cと44マグナムを渡しておきます」

京「ありがと」

小「そして、ロータがXM8とM870ショットガンを渡しておく」

コ「ありがと、大和」

小「そんで、俺が・・・」

バレットをPTRD1941に変えて後、ダブル・バレル・ショットガンを出せるようにしておこう

これで、何とか戦力強化はできたな

この先、何が出るか分かつたもんじゃねえからな  
念には念を入れておかないと・・・

そう思う大和であつた

今度は街の反対側へ・・・そして武器を新型を・・・（後書き）

続く・・・

## 川を渡河中・・・

「・あ「こげ、こげ、こげよ、もっと漕げよ～ランラン、川下  
り～」

今、俺達はストライカーとハンビーで渡河をしている。

因みにストライカーの方には俺・冴子・石井・京さんの四人だ。

ハンビーに残りが乗っている。

さつきの歌はハンビーの方から聞こえている。

とても、のほほんとしている。

あ「Row, row, row, your boat . Gentiyd  
own the stream .  
Merrily, merrily, merrily, merril  
y . Life, is, but, dream」

おつ？ 今度は英語だな。あの年にして英語が歌えるとは凄いもんだ  
な

口「Shoot, shoot, shoot, your gun K  
ill them all now! BANG! BANG! BA  
NG! BANG!  
Life is but a dream」

訳「撃て撃て撃てよ。みんなぶつ殺せー！バン！バン！バン！バン

！あーたまんね！」

おーおい、いくら替え歌だからって子供にそんなの教えていいのか  
？」「一タよ

高「そこの『テブオタ』子供にいろくでもない替え歌を教えるんじゃな  
い。分かつてんの？元はマザーグースなのよ？」

口「はーい」

あつ怒られた

そろそろ対岸に着くな。連絡しておくか

小「おーい、漫才もいいが。そろそろ対岸に着くぞ～」

高「誰が漫才よー！」

高城の文句を無視した。

ブオオン！ダン！

なんとか対岸に着いた。さてみんなを起こすか

小「おーい、対岸に着いたぞ。みんな起きる」

京「う、うんおはよー」「わこまわ」

石「おはよー、大和」

小「おはよっ。さて・・・」

問題はここだ。俺の膝で寝ている美女が一人いる。

服装は昨日のままなので、冴子は裸エプロンの状態だ・・・

俺の理性が持たん、もつと起こうか

小「冴子、起きる〜」

冴「う、うん」ぼお〜

まだ、完全に起きてい不知不

小「よ・だ・れ、垂れてるぞ〜」

冴「〜?／／／! ! !

だんだんと顔が赤くなっていく

クウ〜マジ可愛い!! お持ち帰りしてえ〜!

全国のコーナーさんから怒られるぞ〜 (b YY 作者)

小「すみませんでした〜!」

冴「誰に言つてるのだ? 大和」

小「いや、なんでもない。それより、外に出ようぜ」

冴「なぜだ？」

小「いや、もう明るいし、服、着替えた方がいいかな～って」

冴「～／～／」

またまた、赤くなつた。

可愛いー！

（河原）

コ「小室、手伝ってくれ、アリスちゃんを降ろす」

あ「あ、あのー！」

孝「うん？」

あ「お、おパンツ・・・」

孝「あつ・・・」

ガシッ！-

麗「じゃだから、男子はー私達も着替えるんだから向こうに立つてよー！」

孝・コ「あははー」

ストライカーを壁にして俺達は終結した

小「これから、どうするか

孝「ここから、近いのは高城の家だ。まず、そこから行く

小「じゃあそれで行くわ」

女「わあ～！！」

鞠「お友達の服持つてきたから好きなの着ていいくわよ」

・・・・・

口「今じゃ、お約束の時だ。勇者「俺はまだ死にたくない」

小「同感だ」

京「同じく

石「ぼ、僕も

口「そんな、みんなひどいよ・・・」

隅で体育座りしてしまった。

れて、この後はどうなる事やら・・・

皆の家族は無事かねえ

町の反対側の状況は？

女子たちが着替え終えたので、周囲の警戒に当たった。

そして、河原からストライカーとハンビーを上げることになったので、俺とコータで先に上がることになった。

ザツザツ

ガチャン！

コ「クリア」

小「いいぞ！」

麗「静香先生」

鞠「いくわよー」

ブオオ！ガタン！ブオオオオ！！

コ「ラツトパトロー···うあああ！  
ハア、ハア、チュニジアにいるのかな？俺、」

小「大丈夫、ここは、日本だ」

こつして、無事にハンビーを上げることに成功した。

その後でストライカーも上げた

高「橋で防衛できた・・・わけじゃないみたいね・・・」

麗「でも・・・警察が残ってるなら・・・」

高「そうね。日本のお巡りさんは仕事熱心だからね」

麗「・・・つぶー」

鞠「これから、どうするの?」

孝「高城は、東坂の一丁目だったよな?」

高「え、ええ」

孝「だったら、一番近い、まずはお前の家だ。だけど・・・その・・・」

高「分かってる。・・・期待はしていない。でも」

孝「もちろんわ。」

孝の言葉に少しほんきが出た様子の高城だった。

今度は、ハンバーを先頭に行動を開始した。

小「おかしいな・・・」

口「どうしたの?大和」

小「いや、今日の朝から考えていたことなんだが、ずっと奴らに出くわしていない」

口「あー、確かにそうだね。でも、それがどうしたの?」

小「考えてもみる。河原で、あんなにも大きな音を出したにも関わらず、人っ子一人出てこない。

おまけに、生存者も見当たらない」

確かに、音には敏感な奴らだ。ハンバーのエンジン音や上げるときなんか一番でかい音が出ていたのに回りに変化が見受けられなかつた。

さらには、生存者である。うまく、逃げだせたといつならそれでいいのだが。ほとんどは御別橋の方に向かっている。

残りの生存者はどこかの家に隠れている可能性が高いのだが、回りの民家やマンションに人の気配が全くない。これは、どういうことか

小「コーダ、警戒レベルを上げといてくれ。なにか、嫌な予感がする。」

口「分かった」

そついつて装甲車のふたを開けて、双眼鏡で見張ってくれた。

～孝 side～

今、俺達は高城の家に向かっている。家族の方はどうなってるか分からぬ。もしかしたら・・・

いや、駄目だ。希望は最後まで捨ててはいけない。

麗「どうしたの？」

孝「いや、昨日から、ベリや飛行機が飛び回ってないからどうした  
もんかな？って」

麗「大丈夫……よね」

孝「ああ」

麗「ねえ気づいてる？」

孝「何がだ？」

麗「私達、昨日から出くわしてないわ」

孝「確かに」

昨日から、奴らに出くわしていない。これまび、平和などとははないだ  
う。

そう思つて、ゆくつと田を開いた。

その時である。

口「奴らですー。」

無線で口一タの声がかかつた

口「距離、右前方、二〇〇一！」

また、奴らとの戦闘が始まった・・・

孝 side out

小「やつぱり、おいでなさったか

正直、念ねずみ済めばいいと思つてたが、甘かった

と思つていると、ハンビーが右に曲がった。高城の指示だろう。

すると、今度は左に曲がった。俺達もその後について行つた。

そして、一直線の道に出た。

奴らは所せましといやがつた。

ハンビーの方はスピードをあげた。

だが、

麗「駄目ー止まつてーー！」

いきなり、麗が声を上げた。どうしたのだろう？

すると、ハンビーは左にドリフトしながら曲がつた。

道が開けたのでその先をみると一瞬、太陽の光が光つた

ワイヤーだ。道のど真ん中にワイヤーが張られていた。

小「ヤバッ！」

そつと、ストライカーを右に移動させた。

～孝 s.i.d.e～

奴らが現れて警戒していたが一寸間に近づくほど奴らが多くなつて  
いった。

孝「くそー。ビリゴンことだー？」一寸間に近づくほど多くなつて  
がる

麗「なにか・・何か理由があるはずよー。」

そつと、道が一直線になつた。

高「そのまま、押し切つてー！」

ブオオー！

麗「だめー・・止めてー！」

麗が何かに気づいたようだ

その先を見ると・・・ワイヤーだ。道のど真ん中にワイヤーが張ら  
れている。

孝「ワイヤーが張られている…左に曲げて！」

鞠「え、ええ！」

そいつ言った後、車が大きく左に曲がった。そして…。

ガツシャーン！

ワイヤーに引っかかった。だが…。

ギギギギギー！

車は止まらない

鞠「なんで止まらないの…？」

京「タイヤがロックされている…ブレーキ離して、少しだけアクセルを踏んでください！」

鞠「え？ ブレーキを？」

そいつ言ってアクセルを踏んだ、

ブオオ！

孝「おわ…？」

危つ吹き飛ばされるかと思つたぜ。でも…。

孝「先生…前…前…」

鞠「え？え？」

ガタン！

麗「え？」

その時、車体が前方に大きく傾いて、麗が吹っ飛ばされた…慌てて手を差し伸べるが…

スカッ！

わずかに届かず、麗はボンネットに叩きつけられてそのまま、道路に落ちた。

衝撃が強かったのか、麗は動けないままでいる。

（孝 side out）

痛てて。まさか、こんなとこにワイヤーが張られているとはな

おかげで、止まった衝撃でハンドルに鼻をぶつけちまつたぜ

コ「大和、大丈夫！？」

小「ああ、大丈夫だ。それより、孝達が心配だ、援護するぞ」

コ「OK！」

さあ、ここから人間の意地つて奴を見せてやるぜ！

俺達は高城の家に行く時、奴らと出くわして急いでいたが、途中、誰が仕掛けたか分からぬがワイヤーによつて阻まれてしまい、そのまま立ち往生した。

無線機でハンバーの方に連絡を入れる

小「こちら、ストライカー誰か応答してくれ！」

高「こちら、高城よ！大和、そつちは大丈夫！？」

小「ああ、大丈夫だ。そつちは？」

高「車を止めるとき、富本が車から落下したわ、今、小室が援護している」

小「分かつた。こっちの殲滅が終わつたら援護する。それまで、耐えてくれ！」

高「分かつたわ！」

麗が落ちたのか。急がないと……

さつそく、こいつを使う時が来たな。

俺はバビロンから、PTRD1941を取り出した。

弾は・・・爆裂弾を使おう。こいつなら大量殲滅できるはずだ

小「ドータ！今から、衝撃が来る！しっかり備えろ！」

口「わ、分かった！」

よし、これで準備が整った。行くぜ！

ガチャン！ガロン！

小「行つけー！」

ドオオオオオオオン！

ヒュン…ズッカーン…！！！

小「ミッシャーー！」

今まで20はやつたな・・

よし、このままどんどん行くぞ

（高城 S.I.D.E）

なんとか、自分の家まで辿りつけるかと思つたけど、甘かったわね。

それにしても誰よーあんなとこにワイヤーを張ったのはー？

おかげで戦わなくちやいけなくなつたじゃない。

無線で大和達の無事は確認はできた。向こうにも集まつてゐるらしい。

その時である

小「行つけー！」

ドオオオオオオオン！

ヒュュンヒュンヒュン

高「な、なに！？」

何、今のは爆弾かしら？

いやでも、爆弾は積んでなかつたわよね？

ともかく、ここには武器はたくさんあるんだから行けるわよね？

～高城 side out～

あれから、何発か爆裂弾を撃つたが一向に数が減らない

くそー、こいつらどこから湧いてくるんだ！？

ハンバーの方もやばいっての

仕方ない！

小「コータ！」ひは、何とかするから、お前はハンバーの方に行つてくれ！

「分かつた。気お付けて！」

小「お前もな！」

そう言つて「一タはストライカーから離れた。

どうするかな？

汎「私が手伝うぞ。大和」

小「汎子……でも、この数はさすがに……」

汎「大丈夫だ。」

小「そうか、なら俺もお供しますかね」

そう言つて銃をしまつた。

汎「でも、獲物はどうするのだ？」

小「大丈夫、ちゃんと用意してある」

そう言つてある言葉を言つた……

（汎子 side）

大和は何か秘策でもあるのか？

獲物はなさそうに見えるが……

大和は銃をしまって、独り言のよつと言つた。

小「I am the bone of my sword.  
体は剣で出来ている。」

その言葉を言つた瞬間、大和の体が光つた！

冴「なつ！？」

そして、光が収まつた後、大和の手には一振りの獲物があつた・・

（冴子side out）

ふう～久々に使うな。この固有結界、なんでもアリにしたけど、実際、剣ぐらいしか出してなよな～

そう思つていると冴子に話しかけられた。

冴「大和、それは？」

小「ああ、これも俺のもうひとつ的能力を」

冴「なるほど、それも教えてもらつてないのだが？」

あれ？なんか、冴子の後ろに般若が見えるな～

やつぱり怒つてる？

小「すまない、これも秘密にしておかないといけないものだつたんだ

冴「そ、そつか。やはり、この事態が始まる前に話すと・・・」

小「ああ、同じだ。悪い方向になる」

冴「それじゃあ、仕方あるまい。では行くとするか」

小「ああ、」

そう言つて装甲車から飛び降りた。

因みに今使つているのは、獅子王と呼ばれた英雄の物だ。切れ味は抜群！！

小「はあ！――

ズシャ――

冴「やあ！――

ザシュー――

俺達の接近戦どんどん奴らが倒れしていく。だが、一向に数が減らない。

小「畜生、これじゃあジリ貧だな――」

ザシュー――

冴「ああ、そだな――」

ズシャ！

「これじゃあ、いずれやられてしちゃうな、ハンビーの方も氣になる。

一か八か掛けでやるか・・・

小「冴子、ハンビーの方が危ない。奴らを引き付けるぞ」

冴「分かった」

そつと面を出しながら、奴らを引いた

小「ほら、こっちだ！」

ギー・ギー・ギー・ギー・

冴「こっちだー！こっちに来い！」

ガアアアン！

アアアアアアア

よし、なんとか引いたな。

冴「大和、こっちだ！」

小「応！」

そう言つて階段を昇つた。

小「どうだー?」

しかし、音に引き付けられたのはほんの数体だった。

小「くそ!」

ガーン!

小「こっちだつて言ってんだろー!ー!」

これは、もうだめかと思った。しかし・・・

? 「みんなー下がりなさい!」

新たな増援が来たのだ!

続く

## 回り道

孝 sides

俺達はもう駄目かと思っていた。しかし・・・

? 「みんな! 下がりなさい!」

とワイヤーの向こうから複数の人間が走ってきた。

麗 「消防?」

孝 「いや、それにしても物々しい格好だ」

そう言いながらもその人たちの指示に従つた。

車は後で回収するといつので一安心した

鞠川先生が礼を言つ。

鞠 「助けていただき本当にありがとうございます!」

? 「当然です。娘と娘の友達を助けてくれたのですから

そう言つて、メットを外した

高 「ママ・ママ・」

高城が抱きついた。言わざもがな高城のお母さんである。

俺達は助かったのである。しかし・・・

（孝 side out）

俺は皆がもう助からないと思っていた矢先に、増援が来たのだ！

しかし、一体誰が？

そう思つていると携帯無線から連絡があつた。

小「（）あら、大和だ」

高「高城よ。（）ひはみんな無事、あなた達も早く来て。」

小「悪い、それは無理だ」

高「（）うじてー。」

小「（）ちには、奴らが嫌といつまど、いやがる。そつちに来た救助は期待できない。」

高「分かつたわ。」

小「俺と冴子は別ルートから行く。高城の家は、あの城みたいな奴でいいのか？」

高「ええ、そうよ。」

小「分かった。少しばかり時間がかかるかもしれん。それまで待つ

「ていってくれ

高「待ってるから、私の家で待ってるからねー。」

小「応！」

そう言つて無線を切つた。

汎「しかし、大和」

小「どうした？」

汎「行くにしても、私はこの区域については良く知らない。大和も同じだろ？」

小「安心しな。そういう時のためにこれを用意した」

と言つて小さな端末機を出した

汎「これは？」

小「衛星からの現在の位置を探索できる端末機だ。さつも持つてき  
た。」

と言つて現在位置を汎子に見せた。

汎「なるほど、これは便利だな。さっそく移動しよう

小「応」

そう言って移送を開始した

「東坂一丁目」

小「やつぱり、『』も黙田か」

汎「一度、戻るか？」

小「そうだな、来る途中奴らはいなかつた。」

そう言つてきた道を戻つて行つた。

その途中で移動手段が必要になつたので近くにあつた。バイク屋に寄つた

「バイク店」

小「よし、俺はバイクを選ぶ、汎子は必要なものを集めてくれ」

汎「バイクもいいが『』デートではあるまい？」

小「俺的には嬉しいショチュエーションなんだがな。」

汎「そう言つたな。死んでしまつたら元も公もないぞ？」

小「確かに、じゃあバイクはあきらめますか」

そう言つて奥の部屋に行つた

小「おっこじつはいいんじゃねえか？」

そこには、あつたのは一台の六輪バギーだった。水陸両用だ

沢「御満足いただけたかな？」

小「ああ、「

そして、必要なものを乗せてバギーでバイク屋を後にした・・・

（川附近）

ブロロロロロー！

沢「だんだん、面白くなつてきたな。この後のことを考えてるんだろ？」

小「もちろん！だけど・・・」

沢「けど？」

小「もつと、面白くなるかもな！」

沢「ふつ君とこると飽きなによー！」

小「それは、褒め言葉と見ていいのかな？」

沢「ああ、「

うれしいね～なら、もつと面白くするか！

そして、思いついた音を出して、奴らを引き付けた。

堤防を下ってそこで止まった。

アアアアアアア

ガロガロガロー！

小「はつ、階段は使えるのに急斜面は駄目なのか！」

沢「だが、そもそも言つてられまい」

アアアア

人間なだけが位はするであるが急斜面だが奴らにとつては関係ないのかもしれない

小「そう都合よく行かないか」

沢「仕方あるまい」

小「ならー。」

ブロロロロー！

沢「どうする気だー？」

小「水陸両用を活かす！」

沢「なにー？」

ブォン！..ザブーン！..

小「汎子！大丈夫・・・・グハツ！..」

そこにいたのは水に濡れたいい女だ・・・例えるならね

汎子の服装は上が征服、下が短いチャイナ服みたいな物で水に濡れて制服が透けて中のブラジ・・・ゲフングフン下着が見えちゃつているのだ！

汎「・・・・・」

小「ゴックン！..」

汎「わ、私も女のだぞ。大和」

小「わ、悪い悪い」

そのまま沈黙が続き途中にあつた島みたいな所に上陸した

汎「よく、思いついたな」

小「ああ、奴らは知能はないはずだから泳ぐこともできないだろうつて思つてな」

汎「そうか」

小「とりあえず、俺が見張りをやるよ。汎子は「ハックチュン」ん？」

冴「すまない。体が冷えてしまったようだ。」

小「あつそつだ」

なにか、思いついた様子でバックの中を漁る

小「ほら、これを使えよ」

取り出したのは、薄いタンクトップだ

冴「ありがとう。大和、優しいな」

小「彼女に優しくするのは彼氏の義務！だからね」

冴「ふふつなるほどな」

そつ言つて休憩した俺達であつた。

冴子の闇・・・

川の真ん中についた島で休憩していた。俺達だつたが、あらかた奴らがいなくなつたので移動を開始した。

（高城の家付近）

今、俺達は高城の家が見えるほどまで近づいた。しかし、近づくほど奴らがどんどん出てきやがる

小「やっぱり、多くなつてきているな」

冴「だが、引き返すわけにも行かぬまい」

小「大丈夫！ そこの曲がり角を曲がればあるとこに着くから」

冴「ある所？」

その後、曲がり角を曲がつて行つた

まつすぐ先に、高城の家が見える。その手前には・・・

冴「公園！？」

小「段ボールの家を作るわけじゃないよー！」

そつと公园の中に入れた。

（公園内部）

小「確かに、このあたりに・・・あった!」

汎「何があったというのだ?ハツ!」

ザブーン!!

そう、俺が探ししていたのは噴水である。これで事が進める!

汎「君は、女を濡らす趣味でもあるのかね!?」

汎子が文句を言つてくるが関係ない。このために作戦を思いついたのだから

小「バックパックからガムテープを取つて!」

汎「!?

一瞬、驚いていたようだがすぐにテープを取つてくれた

ビリッ...ビー...ビリッ!

小「よし、完成!」

ブォン! ブロロロロ! -!

エンジン音を出しながら噴水の周りを回り始めたバギー

汎「なるほど、バギーで音を出して引き寄せる作戦だな。考えたな

小「へへつ

汎「で、これから、どうする?」

小「銃はあまり使わない。隠密行動で頼む。」

汎「なるほど、」

ダツ！

汎「承知した！！」

そう言つてバギーから思いつきり飛んで目の前にいた奴を真つ一つに切り裂いた

ズシャア！

俺もその後に続いた。

ズバツ！ズバツ！

どんどん奴らを切り裂いていく汎子。

正直、俺の出番ねえ〜

が、その時である

汎「ツ！？」

汎子が急に止まつた・・・

小「冴子！…どうしたんだよ！？」

なんで、奴らを切らない！相手が子供だからか！？

小「クソッ！」

このままでは届かなかつたので、仕方なくバビロンからバレットを取り出して冴子の前にいる奴ら（子供バージョン）を撃つた！

ドーン！

小「ふう」

とりあえず、間に合つたが冴子は未だに硬直したままだ・・・

今の音で喰きつけられたな。移動するか・・・

小「いっただー！」

そつといて冴子の手を引っ張り、近くの神社まで逃げ込んだ・・・

（神社）

小「ふう～なんとかなつたな」

冴「・・・」

冴子はだんまりだ。どうしたのだらうか？

小「とりあえず、着替えろよ。服は乾いたから

そう言つて制服を渡した。

アイコンタクトで向こう側にいると言つた

「服、着替え中～

冴「もういいよ」

そう言つてきたので、俺はある秘策を考えた。

小「いや～助かっただぜ。あつたぞ冴子」

冴「？何がだ」

小「それはですね・・・」

ガサゴソ

小「これです。」

スツ

冴「？」

まだ、分かつてないみたいだな。

俺はそつと近づいて耳打ちした

小「携帯トイレで」やることですよ。汎子様

汎「…ふつふふ、君は…」

小「笑うなんて酷いな～これでも汎子の事を思つてだな」

汎「いや、分かっている嬉しい。嬉しいよ

なんとか、笑つてくれたな。やっぱり、笑つてる方がいい

その後は沈黙が続いた。しかし、それを破つたのは汎子だった

汎「何も聞かないのだな」

小「いや、正直、あんなふうになる汎子は初めてだつたからさ。できれば聞きたい、でも汎子が嫌つて言つなら言わなくていい」

汎「いや、君にも知つてほしい。聞いてくれるか？」

俺は黙りながら頷いた

そして、淡々と話し始めた

汎「君と出会う前の事だ。私は部活の帰りで強姦魔に遭遇した。そして、そのまま襲われる形になつた。だが、木刀で相手の肩と大たい骨をへし折つてやつたよ。事情を知つた警察は、私を家まで送つてくれた」

小「それなら正当防衛になるんじやないか？でも、それってさつきの事と何か関係があるのか？」

冴「その事じゃないんだ。私は、楽しかったのだ。人を殺しかけいても楽しくてしようがなかつたのだ！それが！眞実の私！毒島冴子の本質なのだ！ただ、力に酔いしれただけの女だ！」

小「なんだ、そんなことか」

冴「そんなことって、こんなと付き合つているのだぞ！君は！」

小「だから、どうした？お前はお前に過ぎない。どんな過去があつたつてそんなの俺には関係ない。そんなことで、離れていく男の方が気が知れるね～。冴子には冴子の魅力つてもんがあるんだから」

冴「大和・・・」

小「冴子、お前にどんな過去があつても、俺は離れやしないよ。だから、ずっと傍にいてくれ。」

そう言つて冴子を抱きしめた。

冴「大和・・・ありがとう」

小「良いってことよ。お互<sup>たが</sup>さまじゃねえか。俺だつて隠してたんだから、能力の事」

冴「ふつそくだな」

なんとか、吹つ切ってくれたかな？

そのまま、夜を明かした・・・

（朝）

小「ふわ～」

昨日はそのまま寝つちまつたな～

え？あの後、何かしたかつて？そんなこと書いたら、18禁になる  
でしょ～この小説が！

冴「んっ」

小「冴子、起きろ。朝だぞ～」

冴「んっ おはよ～、大和」

小「おう、おはよ～。わざそく移動するか

冴「そうだな」

そう言って神殿の扉を開けた

（境内）

小「よし、このまま裏手から行こう」

アアアア

なんだと…。どうせひいて嗅ぎつけた！？

小「くそー。どうしたんだ！？」汎子、裏手に・・・

汎「・・・」

汎子、まだ吹っ切れてなかつたようだな。仕方ない！

ザツ！

汎子の前に出る

汎「・・・大和？」

ザツ！ガシツ！

小「理由が必要なら俺が与えてやる！汎子！お前がどんなに汚れて  
いようと、お前のそばにいてやる！お前を最高の女だと信じぬいて  
やる！だから、死ぬな！俺を死なせるな！頼む、すべての罪とともに  
に俺と、一緒にいてくれ！」

大声を出しながら言った。

そして・・・

スツ

汎「ありがと」

ザツ

汎「嬉しいよ、大和」

そつとつて奴らに向か直つた。そして・・・

冴「はあ・・・」

ザシユ・ザシユ・

冴（じれだ！）

ザシユ・

冴（たまらん！）

ザシユ・

小「冴子・」

冴「はあああ・・・・」

ザシユザシユ・・・

冴「濡れる・・・」

そのまま、突破して高城の家の近くまで来た。

小「ひつちだ。冴子・

冴「大和・

パシッ

冴「責任・・・取つてくれるね？」

小「望むどこうるーー。」

こうして、俺達は高城の家に到着する事が出来た。

あれから、俺と冴子は無事に高城の家に辿り着いた。

みんな、喜んで俺達を迎えてくれた。

その後、高城のお母さんにも挨拶した。

冴「これから、どうするのだ? 大和」

小「とりあえず、現状維持ってここかな? まつ場合によっちゃあ・・・」

冴「ここから、去るか?」

小「ああ、ここの人たちが同じ田舎とは限らないし、まつそれはおいおい考えよ!」

冴「そうだな」

小「とりあえず、着替えてきたらどうだ? また、洗濯しないといけないだろ?」

そり、俺たちは昨日から、同じ服を着たままだ。高城のお母さん衣服を用意させてもらひてゐらし

冴「そうだな。じゃあまた後で」

小「おう、」

俺は、冴子と別れてストライカーがある車庫に向かった

小「よつ、コータ」

コ「ん？あ、大和か」

小「何やつてんだ？こんなとこだ」

コ「見ての通り銃の調整だ」

と言つてショットガンを掲げてきた。

小「まあ、ほびほびにしておけよ。」

コ「ああ、分かつてゐつて」

そつ言いながらも眼は輝いているぞ。

その後、コータと別れて正面玄関に来た。

そこに孝がいたのだが、何やら複雑な顔をしている

小「どうした？孝」

孝「ああ、大和か。聞いてくれよ。さつき荷物を運んでた人たちの手伝つてたんだけどさ。荷物運んで少ししたらもういって言われてさ」

小「？それぐらい普通じゃないか？」

孝「その後、もう少し運ぶって僕が言つたんだけどさ。いついつたことは大人がやるからいいよって言われてさ」

確かに引っ掛かるな、その人たちから見れば俺らは、子供……どういう意味があるんだ？」

小「確かに引っ掛かるな」

孝「だろ？」

小「まあ、それはおいおい考えよう。とりあえず、休んどけば？」

孝「そうだな、そうするよ」

そう言つて孝と別れた。

俺はその場に留まつてさつきのことを考えた。

小（やつぱり、気になるな。この屋敷の人たちが大人とすれば、俺たちは子供、だとしても何の意味が？）

そう考へていると後ろから、声を掛けられた

?「大和」

小「ん? おお、冴子かどうし……」

そこでおれの言葉は止まつた。なんせ和服美人が目の前にいたのだから

冴「？びひした」

小「あつこいや、その……に、似合ひてゐるぢやないか……」

冴「／＼＼＼ほう」

小「あーいや、変な意味じやなくてな」

冴「いや、ぢうぢう意味でも……」

・・・・・

小・冴「ふつははははー。」

そこで、久々に笑った。いや、笑つたことは何度もあった。

しかし、久々にも緩んだ笑いは久々だ。

小「いや、本当に似合ひてゐるぢやないかの」というな

冴「そんなに褒めないでくれ。照れる／＼／＼

小「謙遜するな。本当にこのとを言つたままでじやねえか」

そんなことを話していくと……

高「もうここわ一ママはこつだつて庄じこー。」

バタンッ！！

怒鳴りながら、出てきたのは高城だった

小「どうした？高城」

高「大和。いえ、なんでもないわ！」

そつと階段を下りて行つた

小「どうしたんだ？」

汎「今はそつとしておこつ」

小「そうだな。じゃあ、散策でもするか」

汎「ああ」

その後、庭で散策をしていた。俺と汎子だったが。コーダがきて高城から話があるらしいと言われたのでコーダの後をついて行つた。

麗「で？なんで私の部屋？」

孝「しょうがないだろ。動けないんだから」

そう文句を言つていたのは麗だった。車から落ちた衝撃で鞠川先生に薬を塗つてもらつていたらしい。

・・・・さつきの悲鳴は彼女だったのか

鞠「それで、びつくりお話を？」

高「私たちが」のままでいるかどうかよ」

鞠「ふほつ！」

わあー！びつくりしたなー吐かないでよ。鞠川先生

冴「当然だな。我々は今、より強い結束と合流した形になつてている。つまり・・・」

小「選択は一つきりってことか。飲み込まれるか・・・」

孝「別れるか・・・でも、別れる必要なんてあるのか？」

バンッ！

高「！」で、見渡せばいいわ、街がどつなつていてるのかを！」

孝「街は・・・ひどくなる一方だな」

双眼鏡で眺めていた孝が言つ。そして・・・

孝「手際いいよな。親父さん・・右翼の偉い人だけのことはあるよ。お袋さんもす」」し・・・」

高「ええ、す」」いわ。それが自慢だった。今だつてそうこれからのこと。明日のことと・・・でも、それができるなら…」

孝「たか「名前で呼びなさいよー」」両親を悪く言つちやあいけない

「このひこう時だし、大変なのはみんな同じ」

高「いかにも、ママが言いそうな台詞ね！分かってる！分かってるわ！私の親は最高！妙なことが起こったとたんに行動を起こして屋敷と部下とその家族を守つた！凄いわ凄いわ本当に凄い！！もちろん、娘のことも忘れてなかつたわむしろ、一番に考えたわ！」

あつやあ、暴走しちやつたよ。高城さん・・・

孝「それぐらうに・・・」

高「さすがよ！本当に凄いわ！さすが、私のパパとママ、生き残つてゐはづがないから即座にあきらめていたなんて！」

孝「やめやめやめ……沙耶！――」

ガシツ――

高「か・・・は・・・」

孝「お前だけじゃない同じなんだ！いや、親が無事と分かつているだけお前はマシだ！」

高「分かつた・・・分かつたから離して」

孝「つ・・・悪い」

高「いいのよ。それ本題に入りましょ」

ブロロロロ

小「誰だ？」

高「そうーこの県の国粹右翼の首領、正邪の割合を決めてきた男、  
あたしのパパよ！」

THE高城家（後書き）

高城パパ來た〜。外見めっちゃ怖え〜

## THE高城会長（前書き）

今日から、セリフの前に名前を入れるのを取りやめてみます

## THE高城会長

俺達が、今後のことについて話していると物資を積んだ車列が到着した。

そして、一番前の車から、一人の男が現れた。高城の父である。

名を高城壮一郎

ウイイイイイン

「この男の名は土井哲太郎、四世紀もの間、高城家に尽くしてくれた。我が同志であり、友だ！」

しかし、救助活動の際、部下を救おうとし、噛まれた！まさに、自己犠牲！人間としては最も高貴な行為だ！」

アアアア

ガシャン！

「しかし、彼は人間ではなくなつた！ただひたすら、危険な”もの”へと成り下がつた！」

カシヤ

「だから、私は・・・我が友へ最後の友情を果たす！」

ズバッ！

「トトロトロトロ・・・

「さ、ひばだ、友よ！」

グシャツ！

「これこそが、我々の”今”なのだ！素晴らしい友、愛する家族、恋人だつたものでもためらわざ倒さなければならぬ。生き残りたくば・・・・戦え！！」

そう言つて家の中へと入つて行つた。

「・・・・・」

みんな、沈黙だつたが、最初に口を開いたのは、コータだつた

「刀じや効率が悪すぎる・・・」

「決めつけが過ぎるよ、平野君

「でも、日本刀は骨に当たつたら欠けますし、3、4人切つたら使い物にならなくなりますよ！」

「たとえ、剣の道であつても結果とは乗数なのだ。剣士の技量、刀の出来そして、精神の強固さ、この三つが高いレベルならば刀は戦闘力を失わない」

「でも、血脂が付いたら・・・」

「お、おい平野」

孝が落ち着かせようとすると、

「触るな……まともに、銃が撃てないくせに……」

「平野！あんた、いい加減に！」

「くっ」

そう言い残して、平野は走り去った。

「なんだよ、あいつ……」

「分かつてやれ、平野君も男子なのだ」

「それは、分かつてますけど」

「君のそういう所が……いや、同じ硬貨の裏表か」

そう言つて汎子は去つて行つた。

「孝」

「なんだよ？」

「あまり、深く考へるな。考へてもだめなら、もう一度コーラと話  
し合えばいい。話しあえば原因が見つかるはずだ」

「……ありがとう、大和」

「気にはすんな。じゃつ俺も散策してくるわ」

そつ言つて、場を後にした。

「庭」

俺はまだ見ていなかつた。庭に来ていた。すると・・・

「大和」

「ん?」

池の所に冴子がいた

「やつぱ、似合つてゐるな～」

「よしてくれ」

「謙遜するな。それより何見てんだ?」

「ああ、ここにこる、鯉が素晴らしいへな」

「どれどれ・・・」

見ると、池には三匹の錦鯉がいた。

「小紋龍が素晴らしいと思わないか?」

「ん~俺、あんまり鯉とか詳しくないからな～」

「やうか。」

しばらく沈黙が続いた

「なあ、大和」

「なんだ?」

「やつらのビハ櫻つづ。」

「平野がキレたことか?」

「ああ、彼にとつて、刀とはどつ見えるのかわからない」

「そこは、しょうがないんじゃない? それより、ロータは効率の方を気にしてたんだと思うな」

「それはなぜだ?」

「ロータといひての銃つてことは、一種の表しなんだよ」

「表わしそ?」

「そつ冴子で言つなら、刀、麗で言つなら、槍、みたいにな。だから、ロータにとつては銃、自分にできることがやつと見つかっていつところかな?」

「ほう」

「だから、一時のものだからすぐ立て直るとゆづよ。それより・・

・

「今後、どうするか、だな？」

「ああ、ソニーにいればみんな、普段の日常が手に入れられるだろ？」「

「しかし、一歩外に出たら……」

「ああ、地獄だ。今までの世界は失われただろ？ 永久的に……」

「ソニーで、高城君の設問に戻るわけだ」

「そうだ、このまま、飲み込まれるか、別れるか。どちらかを選ぶことによって、これからが変わってくる」

「まあ、俺はみんなの考えに従うよ」

「クスッ、大和らしいな」

「そういうコーダー的な素質はないんだよ」

「まあそういうことにしてもいい」

「ああ、そういう「何を、騒いでいる……」なんだ？」

「あつちの方からだ。行つてみよう。大和」

「ああ、」

（平野 side）

俺は、銃を抱えて裏庭に来ていた。そこで、高城さんの部下の人たちに絡まってしまった

「さつと、銃を渡さないか！」

「嫌です！」

「なあ、君このじ時世だ。そんなにたくさん銃を独り占めしちゃあ、ダメだよ」

「ダメです！これは、借り物だからそれに俺は、俺は

「ちつこのままじゃあ埒があかねえ、おい！」

「ああ、」

「そのまま、銃を渡してしまったら・・・  
そう想つた時、

「何を騒いでいるーー！」

「か、会長ー！」

「この、ガキが銃をおもちゃと勘違いして・・・」

そこには現れたのは高城のお父さんだった

「少年！名を聞け！私は高城壮一郎！」

「ひ、平野マーク！藤美学園一年B組、出席番号32番です」

「声に霸氣があつてよろしい平野君、ここに、たどり着くまでさぞ  
かし苦労しただろ？・・・どうあっても銃は渡さないつもりかね  
？」

「駄目です！嫌です！銃がなくなつたら・・・俺は、俺はまた元通り  
にされてしまつ！自分でやく見つかつたと思つた  
のに！」

そう、俺は自分にできることがこの事態になつてよつやく見つかつ  
た。しかし、銃を取り上げられたが、俺は、みんなをやく見つから  
きくなつてしまつ！

「自分にできる」とはなんだ！？

だから、俺は

「そ、それは・・・」

その時、声が掛つた

（平野side out）

「あなたのお嬢さんを守る」とですか！

そう言つて孝が現れた

「い、小室・・・」

「小室？聞いたことある名前だな。娘とは仲良くなれやうつてゐる  
みつだが」

「ええ、ですが、この地獄から沙耶・・・お嬢さんを守り続けたの  
は平野です！」

「コータちゃん！」

ガシツ、

アリスがコータに抱きついた

セヒで、冴子も重つ

「彼の活躍は自分も見ております。高木総帥」

そこで、俺も重つ

「彼は素晴らしい男ですよ。高城会長

「あひこ、沙耶が言つ

「あたしもよ、パパ。これは、どうしようもないチンチクリンの軍  
オタだけど、『いつがいなければあたしは、今頃、連中の仲間だっ  
た』。『いつがあたしを守ってくれた。パパじゃあなくってね！』

「高城、さん」

「ふんつ」

そう言って、高城会長はその場を離れた。

俺は、コータに寄った

「大丈夫か? コータ」

「や、大和」

「声が出れば大丈夫だな」

そう言って肩を貸した・・・

「一タの騒ぎの後、俺と冴子は高城会長に呼ばれて、邸内にある離れへと向かっていた

「なんだうな？話して

「たぶん、私に関係することだうな

「冴子の？」

「ああ、昔、高城会長は私の父に『指南されたそだ。多分その話だろう』

「やつこえば、冴子のお父さんは？」

「今、国外の道場にいる。」

「え？道場開いてるのか？」

「ああ、」

「すじいな～」

そう言つてゐるうちに離れへとついた。

中に入ると高城会長がいた・・・正直、怖い

「そこに座りなさい」

「「失礼します」」

そして、後ろから、刀を出した

「「れをどう見る?」」

そう言って、冴子に渡した

しばらく、見て

「…」れは…・・・ことに珍しい」

「見えたか?」

「反り浅く、波紋の浮かぬ切先両刃の小鶴作り…・・小銃兼正、村田刀と見受けます」

「むう、さすが!見立て通り、明治半ばあの村田銃で知られる村田少将が作らせた逸品だ。」

冴子が刀を返すが…・・

「それは、貴女の物だ」

「…・・無礼を承知で申し上げますが、正当な理由がなければ貰い受けません」

「毒島先生の『指南を受けたお礼…・・・といふことにしてくれないか?』

「それなら、父にお渡しください」

「はつはつは、さすが、毒島先生の『息女だ本音を告げよ』といふか」

「申し訳ありません」

「想像はついてこよう。不出来な我が娘のことだ」

「確かに、何度も命を救ったことはありますが、彼女に救われたこともあります。そこまで守りたいのであれば常に傍らに置かれてしまえば良いではありませんか。高木令嬢は・・・・『両親を心より敬い愛しているのですから』

「親子は似るところ」とかな

「ならば、なむせりあるには自分ではなく小室君に・・・彼こそが我々の・・・」

「幼い頃より見知つてゐる良い少年に育つたーしかし・・・彼はまだ、不安を抱いてゐるよう見える」

「迷い・・・ですか。確かに」

「とにかく・・・」

「はい・・・」

「彼とはどういった関係なのだ?」

しばらく、俺は空氣と化していたがいきなり話を振られた！

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私の名前は小田原大和。冴子とはいお付き合いをしています」

「ちょっと大和／／／

「はつはつは、なるほど、冴子さんもいい男がみつかりましたな！」

「た、高城総帥まで！」

「いや、男がいるというのは恥ずかしい」とじゃない！むしろ誇るべきだ！どんな時でも支えてくれる男子がいれば！大和君」

「はい」

「私は、毒島家とは、昔からの知り合いだ。ご息女のことによく知っている。今、彼女の父は海外で道場を開いている。それ故に帰ることがままならない。だから、私から、言つておくどんなことがあっても彼女を守つてほしい」

「ええ、分かつていますよ。俺も冴子にはいろいろ助けてもらっていますからね。冴子が力を必要としてくれているのなら全力で協力しますよ！」

「大和／／／

その後は雑談になつた。

しばらく話し込んでいたが部下の人来て一緒に出て行つた。

「私たちも戻るうか？大和」

「そうだな」

そう言つて屋敷の方に戻つた・・・

（屋敷）

屋敷に戻つた俺は正面玄関にいた。

なんでも、孝が高城総帥に自分たちの両親を捜すと言つた所、快く承諾してくれたらしい

今、汎子も着替えに行つてゐる

「よう、孝」

「大和、悪いな。僕の我儘に付き合つてもらつて

「いいつてことよ。ここにいるよりみんなといった方が楽しいからな。  
それに・・・」

「それに？」

「俺以外でストライカーを動かせる奴いるか？」

「あつ確かに」

「 だろ？」

と話していると麗がやつて來た

「 なんの話？」

「 ああ、大和の装甲車の話をした。といつよりも大丈夫なのか？」

「 ええ、大丈夫よ。それより装甲車の話つて？」

「 俺の装甲車、俺以外に動かせる奴いるか？」

「 いないわね」

「 だろ？ もしかしたら、大人数なるかもしけないのに」

「 ええ、そうね。ありがとう大和」

「 気にすんな」

そう話していると全員が集まつた。

その時！

「 ！」

タツタツタツタ

麗が急に走り出した

「麗！？」

麗の後を追うとそこには、ボコしたはずのクズ野郎がいた

「お久しぶりね。紫藤先生？」

「み、宮本さん・・・御無事で何より」

「ねえ、先生。私がどうして、銃剣を使えるか知ってる？銃剣も習つていたからよー負け知らずのお父さんに！」

そう言って銃剣を頬に突き付けた

そして、言い続けた

「何事にも動じないお父さんが、私に泣いて謝ったのよー自分で留年させたとね！」

「麗！」

孝が動こうとしたが俺が止めた

「大和！何すんだよー！」

「これは、本人が決めなければならないことだ。他人が横槍を入れるもんじゃない」

「くつ」

しかし、紫藤がこう言つてきた

「さ、殺人を犯すつもりですか？警察官の娘でありながら殺人犯に・・・」

「あんたなんかに言われたくないわよー！」

「ならば、殺すがいい！－！」

そう言つて出てきたのは高城会長だった

「その男の父親とはいくつかの関わりがある。だが、今となつては無意味だ！望むなら殺せ！私も必要なら殺す－！」

そう言つて下がつた。

これは、麗自身が決めなければならぬからな

時が止まつたようにも思える。ただ、長い沈黙

そして・・・

スウ

麗の銃剣が下がつた。

「それが、君の答えなのかね？」

「殺す価値もありませんから」

そう言つて俺達のもとに来た

でもな～なんか癪に触るんだよな～そつだ！！

「高城会長」

「なんだね？大和君」

「あの肩を一発殴らせていただけませんか？」

会長の目を見て言った

「分かった。好きなようにせい」

よし、判決が下った！

「よひ、クズ野郎」

「や、大和君」

「これで、最後にしてやるよ。オラアーー！」

そう言つて火事場の馬鹿力の如く渾身の一撃を肩の顎にかました

「ぶべらあーー！」

ひゅ～ドサッ

「あ～すつきりした！！高城会長、もついいですよ」

「うむ、承知した！お前たちは去れ！後ろにいる生徒もだ。本来な

ら鍛えなおしてもよかつたが今は、そんな暇などない……乗つてきたバスで去れ……！」

そう言つてクズ野郎を乗せた一行は高城邸より追い出されたすつきりしたなーと思つていると

「大和」

「ん?」

「ありがとう」

「気にはすんな。奴の顔を見たら無性に殴りたくなつただけだ」

「うんー。」

そつと離れて行つた

入れ替わりに汎子が來た

「どうした? 汎子」

「いや、とってもかっこよかつたぞ。大和」

「汎子に言わると照れるなー」

汎子も妙にすつきりした顔になつていた

その時

「あー！」

鞠川先生がいきなり大声を出した

「どうしたの？せんせー」

「お友達の電話番号今、思い出したのよ～」

と手を振つて言つた

「それより、携帯、携帯

「あつはー」

と言つて孝が携帯を渡す。

勢いよく取つて番号を押し始めた鞠川先生

「えーとーがーじで、2がーじで・・・

と、とても遅い番号を押しながら言つた。そこでコータが・・・

「かわりに押しましょうか～？」

と言つたが

「分からなくなるから邪魔しちゃだ～め！」

と言つた

数分後

プルルルル

「はい、もしもし？」

「リカ～、良かつた～繫がつた～！」

何とか繫がつたようだしばらく終わらないであろうと思った。

その時！！

ピカーッ！！

「な、なんだ！？」

孝が叫ぶ

「これは、もしかして！？」

ここに、人類は本当の闇に直撃する・・・

## THEトリックライン

（洋上空港）

私は南リカ、警察の特殊部隊S.A.Tの狙撃部隊に所属している。

一仕事終えて空港内で葉巻を吸つていると携帯が鳴り出した

「はい、もしもし？」

「あ～リカ！？良かつた～繫がつた～」

相手は私の親友鞠川静香だ

「静香？今、どこにいるの？私の部屋？」

「ん～ん～あそこはもうダメ。あつ鉄砲とか借つさやつてるけど・・・」

「それより、今どこに・・・」

「いるの？？」と聞いかけた急に電話が切れた。

ふと、外を見ると空が光っていた。これは、まさか！？

すると、一般市民から説明を求められた

「おい、今の光はなんだ？あんた、警察だろ？？」

「簡単なことよ・・・ふうー

葉巻を吸いながら言った

「今日から世界は本当の闇そのものになるのよ。」

（高城邸）

「一体どうしたってんだーー？」

孝が叫ぶ

「これは、もしかしてーー？」

高城は気付いたように言つた。俺も同じ答えだらう

「高城は気付いたようだな

「ええ、てことは大和も？」

「ああ」

他は分かつてないようだが・・・

「なあ、沙耶一体何がどうしたってんだ？」

「あれは、EMP攻撃よ

「「「「EMP攻撃？」」「

みんなが同じ口調でこう。てこつかコータ、お前も分かつてなかつたのかよ・・・・

そこで、俺が答える

「日本語で言つなら電磁波パルス攻撃とも言つ。この攻撃は核弾頭を空中で炸裂させ。中に入つている電磁波が地球の磁力で引っ張られ多くの地域にある電子機器を破壊してしまつ攻撃だ」

「やつ、そしてその電磁波を受けたら最後、電子機器は死ぬわ

俺と高城の説明に麗が反応する

「てことは、携帯電話もダメなの！？」

「携帯どじりか車、パソコンまでもがダメよ。恐らく発電所も死んだでしようねEMP対策しているなら話は別でしようけど、そんなの、自衛隊と政府機関のじへ一部しかしてないわ」

「そ、そんな・・・」

皆が暗くなる。そりやあそつだろつ今まで頼りにしてきた電子機器が使えないんだからな・・・

そこで、後ろから、声がかかる

「直す方法はあるのか？」

高城会長だ

「焼けたプラグを変えれば動かせる車はあるかも、たまたま電磁波の影響を受けていない車もあるかもしれない」

「すぐに調べる」

「は？」

「沙耶！」

「なつなに？」

「！」の状況でよく冷静に物事を判断できた。褒めてやる

「ありが・・・」

最後までお礼を言おうとしたが思わず出来事が発生した

「ば、バリケードが・・・！」

大声で言つ部下の人達

正面を見ることが多い奴らがいた

「ひつ、く、来るな、来るなぐわああ！！」

一人の部下が奴らの餌食となつた

「門を閉めよ！死人どもを中に入れるな！」

「しかし、会長。今、門を閉めれば、外にいる連中を見捨てること

になります！」

「中に入れて、全滅になつたら元も公も言わん！やれ！」

そつ言つて部下に指示を出す

ガララララー・ガシャン！

「一人入つたぞーー！」

アアアア

「ポケットの中には・・・」

ダアン！！

「GUUN、ひ・と・つ」

と親指を上げながら悪人面で言つ「コーダがいた

門を開めたおつちゃんは・・・

「すまない、少年、俺が間違つてた！」

と言つた。

「会長！奥様！獲物をお持ちしました！」

と言つて部下の人々が武器を持ってきたみたいだ

そして・・・

バサツビリへ

とスカーフを放り、スカートを破つた！

そこで俺は・・・

「ビューティフル！」

と言つた。

「何言つてんのよーあんたはー..」

ゴン！

「アウチ！」

と漫才を繰り広げたところで高城のお母さんから支給品があつた

「お使いなさい。沙耶ちゃん」

と言つて銃を渡してきた。すると、コーダが・・・

「ル、ルガーポ8のオランダ植民地軍モデルだー！」

興奮しながら言った

「どうして、ママが銃なんか持つてるのよー！」

と最もな質問をした

その答えが・・・

「ウォール街で働いてた頃、エグゼティブの護身コースに通つてた  
もの、弾当てるのパパよりうまいかもね」

Г Г Г Г Г . . . . . Г Г Г Г Г

みんな、黙ってしまった。

その時！

ガシャアーン！！！

鉄門が音を立てながら倒れた。近くにいた部下の人達は奴らの餌食となつた。

そこで俺は

「！」から、俺とコータで援護射撃をする！孝は遊撃、冴子と麗は近くにいる奴らを倒せ！高城と鞠川先生とアリスちゃん、京さんは俺達の後ろに居てください！」

「心！」

俺は、バビロンからPTRD1941を取り出した

「ニーダ、Are you Ready?」

「OK...」

「 」 「 」 「 」

ダン...!

ドロー...!

こいつで、俺達のゲッティラインが開始された・・・

しばりくは、防いでいたが奴らがビヨビヨ湧いてくる。

孝が叫ぶ

「これじゃあ持たないな！」

そこで、俺が叫ぶ

「ああ、そうだな！」

ドロー...!

「弾も持ちません...」

ダン...!

「 」 「 」

グサつ...!

「一度、引ひつけ。会長がいる一階に避難するんだ！…」

そう言つて俺達は高城会長がいる一階に避難した

「会長、隣家の方も調べましたがまだ、襲われてません！門の補強も可能です！」

「うむ、これより敵中を突破し隣家に向かう！生き残りたい男どもは武器を取れ！女子供はその後に続け！」

「パパ、それより立てこもった方が…」

「守つて何の意味がある？あの鉄門を破られたのだぞ！立て籠もつても破られ、食われるだけだ！」

そう言つて前に向き直つた。

後ろには大人たちに混じり俺達がいた

「親孝行するのではなかったのか？小室君」

「つー」

「ためらわず、自分の生きたいように行くがいい

「はーー！」

「平野君」

「ーー？」

「娘を・・・頼む!」

「パパ、それってどうこうう・・・」

ガツ パーン!

高城のお母さんが沙耶をほたいた

「ママ?」

「私と壮一郎さんには役割があるのよ。沙耶ちゃん。小室君や平野君にお預けするのが私たちの我儘、お願いだからこれ以上私たちを悲しませないで・・・」

「ママ・・・」

「ああ・・・お行きなさい・・・」

「ママ、パパ、大好き!」

そつ言つて高城が俺達の元に走り寄つた

そして、車を動かすため車庫に来た

そこで、高城が叫ぶ

「松戸さんー?・・・いない?」

「お嬢様」

と言つて車の下から現れた。あの位置だとパンツが見えるな

「ひやあー? ビ」から現れるのよー?」

「ラッキーですよお嬢様、この一台ともEMP対策されています。」

「本当ですか~。じゅあすぐに動かせんんですね?」

「ダメージを受けてるので調整に時間が要ります」

時間が・・・と思つていると涼子が呟く

「なら・・・」を死守する他ないね」

向き直つてみるとそこには大量の奴らが・・・

そして、孝が叫ぶ

「行くぞ！」

俺は、ライフルから軽機関銃に変えた

「死にたい奴はかかるてこいやーー！」

— · — · — · — · —

M60が火を吹く

「いやあアラモだよー。」

「そんなオチ聞きたくないね！！」

と撃ちながら話していくと後ろから静香先生が声を掛けってきた

「みんな！乗つて！」

「よし！ストライカーの方に京さん、アリスちゃん、ジーク、冴子が乗つてくれ！」

「分かつた！（ワン！）」

そう言って乗り込んだ

「よーし、行くぜー！」

「オオオオオオオ！」

俺達は勢いよく車庫から出た

松戸さんは屋敷の方に残つたみたいだ

途中、高城会長ともすれ違つた。

そして、破れた鉄門から勢いよく飛び出し、住宅街に出た

今は俺達、ストライカーが先頭である

「どうから、抜ける？」

「あそこしかあるまいよ」

そう言って冴子が指した方向には紫藤が乗ってきたマイクロバスが事故っていた

「こんな時に事故るなよー京さんー」

「は、はい！」

「運転、お願ひします。操作方法は普通の自動車と同じですからー。」

「わ、分かりました！」

俺はふたを開けてバビロンからジャベリンを取り出した。

そして、照準をバスに合わせて言った

「fire—!」

バシュ、シュイイン

ドッカーン—!

ミサイルは見事バスに直撃して木端微塵となつた。

「ふう、間一髪だった・・・」

「おつかれ、大和」

そう言って冴子はタオルを渡してきた

「おう、サンキュー」

そして、無線で連絡を入れた

「ひちら、大和だ誰か応答してくれー」

「孝だ、そつちは大丈夫か?」

「ああ、こつちは大丈夫、そつちは?」

「こつちも大丈夫、でこの先何だけど、国道に出るから、そこで一日休憩にしよう」

「OK、了解した」

そう言って無線を切った。

はたして、この先にあるのは何か?それは分からぬ

だけど、一つ言えることは何もかもが変わったということだ・・・

とりあえず、休もう

「国道」

なんとか、高城邸から、脱出した俺達は、国道まで出てきた。

そこで、休憩を計画していたが・・・

アアアア

そこに、大量の奴らがいた。

ありすちゃんが言つ

「いっぽい・・・」

孝が奴らを睨むように言つ

「じへじへってんだよー。」

逆に俺が言つ。

「簡単なことだ、孝」

「じへじへ」とだ?」

「EMP攻撃で、あらゆる音がなくなつた今、音が出ているのはこのハンヴィーとストライカーだけだ」

ト、ト、ト、ト、ト、ト

高城が後に続く

「大和の言つとおりよ、あらゐる音がなくなつてさらにパパ達がダイナマイドまで使つて、音を響かせたんだから、集まつてくるのは当然！…」

「だが、今はそれよりもこゝをどう抜けるかだと想つよ」

と涼子が言つ

「ああ、一つ提案があるんだが・・・」

俺が提案を出す

孝が返事をする

「なんだ？大和」

「この近くには倉庫街があつて、俺が所有しているんだがそこまで行ってみたい」

そう、この近くには倉庫街があつてそこに俺が準備の時、一緒に買つた。中に何があるかは秘密だけね

「でも、どうやって？」

麗が聞いてくる

「一田、引き返して下の道から行く

「分かった、僕は大和の考えに賭けてみるよ」

と賛成してくれた孝

その後、皆も納得してくれたみたいで付いて着てくれたことになった

（倉庫街）

ここには、思ったほど奴らはいないようだ……

さて、俺の宝箱を開けますかね～

「よし、ついた」

と言つて、一つの倉庫の前に止まつた。

「大和、ここには何があるの？」

とコータが聞いてきた。大丈夫、お前が喜ぶ物だから……

「じゃあ、開けるぞ」

ガラガラガラ

倉庫のシャッターを開けた。すると……

「うひょーーーーー！」

「一タが跳ねまわった

「大和！これも、もしかして！？」

「ああ、すべて、買い取った」

倉庫の中には、文字通り軍用車両のオンパレードだった。

日本の最新式の10式戦車から、第二次世界大戦で活躍したタイガー戦車など軍オタに堪らない宝庫となっていた

「大和、どうしたんだ？」「これ」

孝が質問してきた

「さつさとも言つただろ？ 買い取つたと」

「でも、テレビで見たことあるけど、この戦車なんかまだ新しいやつじやないのか？」

「ああ、そうだ。でも、裏で根回ししたからな」

「そ、そ、う、な、ん、だ、・、・、」

まあといつても各国のお偉いさんにちょっと貢物をすれば簡単に回してくれたからな～いや～お金つて偉大だね！」

「とりあえず、一タ」

「なに！」

「お前が好きなのを選べ」

「マジでー?」

「本気と書いてマジと読むー。」

「よし、分かった!」

と言つて、走りながら去つて行った。しばらく時間が掛かるだらう

そつ思つていると、汎子が寄つてきた

「大和」

「なに?」

「これほどの物、金の方はどうしたのだ?」

「ああ、親が残してくれてたみたいでな。もういねえが

「…す、すまない」

「気にするな、もつ何年も前の事だよ。それに、今の方が楽しいからな

「どうこう」とだ?」

「汎子と一緒に居りたい」と

笑いながら言つた

「ー／＼／＼

照れたようだ。可愛い！！

「じゃあ、俺もコータの方見てくるわ」

「あ、ああ分かつた」

そう言つて一旦分かれた。

「コータ、どこだ〜？」

「コータを探しに来たのだがどこにも見当たらない。どこに行つたんだ？」

「大和！こつちこつち

と声がしてみたので行つてみた

「よひ、決まつたか？」

「うん、これにするよー。」

と興奮しながら、指さした物は・・・

M1A2エイプランズであった

「エイプランズにするのか・・・」

「うふ、ここでの道路は車幅も問題ないからね」

「さうか、で、サブはどうする?」

「サブ?」

「ああ、ここにある奴らは全部自動操縦装置が付いているんだ」

「この倉庫にある物は買い取った後、偉い人に頼んで、最新の装置にしてもらっている。」

「本当なのー? 大和」

「ああ、だが、一台にしてくれ。それ以上だと動かしづらいから」

「分かった。それじゃあ・・・・」  
「れ――」

「といつて指さしたのは・・・」

「M939ガントラックか・・・」

「うん、小室と西本の親を乗せるにしても兵員輸送車は必要でしょ?  
?」

「確かに、よし、こいつをちょっとばかし改造しよう!」

「どんな風に?」

「それは、見てからのお楽しみ」

そつ言つて、車両に乗り込んだ

～倉庫内の整備場～

「さて・・・」

とりあえず、ガントラックを改造するため倉庫内の整備場に来た。  
俺だが実は試そうと思っていたことがあったのだ！

それは、アニメみたく、貨物の方の屋根に砲台は付けられるかどう  
かといふことだ！

ふつふつふ楽しみだな～

そう思つて作業を開始した

～孝 side～

俺達は大和が所有しているという倉庫まで來た。中に入つてびっく  
りした！

テレビとかでしか見たことのない軍用車両が所狭しと並べられてい  
たのだから・・・

コーダが持つてきた物にも驚いた！なんと戦車だ！

「コータは二二二二二ながら僕に言つた

「これで、小室と宮本さんの親を探しに行けるね！」

正直、ここまで固める必要はあるのかどうかは僕には分からない。でも、大和も僕達の我儘に付き合つてもらつてはいるんだ。本人がきたら、ちゃんとお礼を言つておこう

ヽ孝 side out

ヽ大和 side

俺はガントラックを整備した。正直、自分でもビックリしている。まさか、本当にできたなんて・・・

車体

後輪をタイヤからキャタピラに変えた（ハーフトラックのような感じ）

後ろに連結車両を付けた。（兵員輸送用）

ガントラックの武装

M2キャリバー 二丁

機関砲 二丁（ボンネットの上に取り付けた）

ミニガン 四丁（側面部分）

ホイール トゲ（ボンドカーのあれ）

120mm滑走砲（90式の砲台）

とつあえず、こんなもんか？なんか、兵員輸送車といつより攻撃車両になつちやつた・・・まあいや後ろに輸送用の車両は連結してあるし

出発しようつかな？

やつ思つて頭の所に向かつた

→大和 side out ←

皆の所に着くと睡然としていた。コーダだけは目を輝かせていたが・

「どうしたの？」これ

と高城が質問してきた

「ああ、こいつの場合、奴らに突っ込んだら身動きが取れないつえに横転する可能性が高いこと思つてな。だから改造した」

と説明した

「・・・やつ」

微妙な間があつたが気にしないようひよじてひよじよう

「それじゃあ、出発しようつか

「あ、ああそうだな

孝がなんとか復活したようだ。

ついでにハンヴィーとストライカーも交換した

→再び国道

また、国道に戻ってきた俺達、だが、今度は強い味方がいる  
そこで俺は、コータが乗っている戦車に指示をだした

「よし、コータ。いっちょ派手に行ってくれ！」

「サーイエッサー！！」

その返事とともに突進を開始した。

キュラキュラキュラ！！！

グシャグシャグシャー！！！

多くの奴らを踏みにじって行った。しかも・・・

「イーヤッホーウ！..！」

コータは興奮していた。

俺は指示を出した

「よし、皆、コータに続けー！」

そう言って前進を開始した。

ショッピングモール・・・あのゲームを思い出す・・・

俺達は国道を抜けて孝達の実家の近くのショッピングモールの付近にいた

「ショッピングモールか・・・」

やたらとでかいなこのショッピングモール・・・あのゲームを思いだすな）

と考えていると孝に声を掛けられた

「どうした？ 大和」

「いや、ショッピングモール見てたら俺がやっていたゲームを思い出しちゃね」

「なんでこりやつ？」

「デッドオイジング」

「あのー8禁の?」

「ああ、」

「へへ大和もゲームやるんだ」

「おこおこ、俺をどんな風に思つてたんだ？」

「「危険人物A」」

「・・・・・」

なにそれ？俺つて日常でもそんな風に思われてたの？泣いちゃうよ。

俺

といじけていると冴子が話してきた

「そんなことよつ中に入るぞ」

「ちよつ冴子、そんなことって言こぐとはないだろー」

「はいはい、文句は後で聞いてやる

「グスン・・・・分かつたよ」

そつ言つて中に入った

～ショッピングモール内～

「つお～なかなか広いな～」

中の広さをみて俺は感想を出した。

「とりあえず、手分けして生存者がいるかどうか探してみよう

と孝が提案を出す

「待て、孝」

「なんだ? 大和」

「銃はここに入れておけ」

と言つてバビロンを出した

「なんでだ?」

「すべての生存者が穏和的とは思えない。最悪、武器を強奪される可能性がある」

「確かに・・・よし、みんな武器は大和に預けておいてくれ」

そう言つて皿は武器を俺に預けた

その後、手分けして生存者を探し出した。

案外、簡単に探し出すことができた。

生存者は全部で10人いた

その一人は警察官で婦警の中岡あさみさんだ

「初めまして、小田原大和です。」

「初めまして、あさ・・・本官は中岡あさみです」

と紹介して一旦そこでお開きにした。

それからは、荷物を入れたりして一日が終わった・・・

「ショッピングモール」曰田へ

「沙耶さん、これいけますかね？」

俺らは、食糧が足りなくなってきたのでここでのスーパーで食糧を集めることにした。あさすがに俺達の人数じゃ結構消費するからな・・・

今は精食品を見ている。なぜなら、缶詰などの保存食品はあらかた無くなっていたからだ

「停電は昨日！賞味期限もみて！匂いも嗅いだ方がいい！」

と見ている

「おい待て！生の肉や魚は干物や燻製にするときめたのに勝手に食いつもりか？こういう時だからこそ、規則を守らないと」

「し、島田さんまつであります！」

「あ？ あんたか」

「そ、その子たちは昨日来たばかりでありますから、あさ・・・本官たちのルールを知らないんですよー」

と言つて島田という男に注意した

「チツ！」

## ガラガラ

舌打ちをしてカートを押しながら去つて行った

「助かりました。中岡さん」

と礼を述べて

「とんでもない。当然の事をしたまでありますよ。」

と敬礼しながら言った

「で？ 昨日バタバタして聞きそびれちゃったんだけど、お巡りさんあんたがここをまとめたわけ？」

高城が質問をする

「いえ、あさ・・・本官じゃなくて指導してくれた松島先輩が・・・

」

「・・・・・その先輩は？」

「あつはーーーーーの安全を確認してから本署の方に応援を呼ばれに行きました。昨日の午後です。」

と語って外を指した

「・・・・・」「

「だ、大丈夫です！先輩は本官と違つてとても優秀な方ですから」

と手を大きく振りながら言つた。すると・・・

「お～い本官のネーチャン、そろそろ//イーティングの時間だぜ～」

「あーはーはー、今行きます」

そつぱひで「一タ達の元を離れた。その後、俺達と合流した

「どうだった？」

「ああ、全部の出入り口を封鎖してある。入られる心配はないな

と俺が答えた

「ベテランの警官がいたらしいわ、立てこもる」とはできるわね

ほーつベテランの人がいたのかなら、心配ないな

と思つていろと孝から質問が来た

「なあ大和、昨日銃を隠した理由つて・・・」

その質問に対しても答へよつとしたが代わりに高城が答えた

「いいの連中パパの部下よりまつは良くないわよ

「ああ、そんな連中に渡しても弾の無駄遣いにしかならない。」

「なるほどな～」

「ゾロはすぐに駄目になる。あんた達は必要な物を集めてくれぐれも先にいた連中を刺激しないで」

確かにない規律のない連中にインフラが死んでるショッピングモール、三日は持つてもそれ以上にはいかない。最悪の場合奴らの餌場となる

「所で、高城」

「なに?」

「お前はビリあるんだ?」

「私は着替えるのー!」んなヒラヒラした服装じゃござつて時に動けないでしょー?」

といつてスカートを引っ張りながら言った

「分かつた分かつた、だから怒鳴るな」

と言つて分かれた

（一階部分へ

「ビリじょつかな～?」

孝は悩んでいた。やつき、高城に何か言われたらしく。そこで、口一タガ・・・

「どうあえず婦警さんに話して見ようか？分からず黙つて説じやな  
れやうだし」

「やっぱ、銃を隠しておいて正解だな」

「「小室？」」

俺とコータは素つ頓狂な声をだした

「いや、婦警さんの前でさすがに銃を出すのはちよつとい···

そこで俺が答える

「確かに、俺らこそ一つか選択肢がないからな」

「一人ともそつち専門だからな。教えてくれよ

俺の代わりにコータが答えた

「簡単なことだよ。使うか使わないかさ

と悪人顔で言った

「やうだな」

俺もニヤケながら言った

「二人ともきつこな~」

「でも、小室なら分かるでしょう？」

「やつやあ、まあ」

と苦笑いしながら言った。

その後、俺は孝達と分かれて冴子を探しに行つた

「冴子はどこだ？？」

「ほりだよ。大和」

と声のした方向に向くと服屋こいた

「なにしているんだ？」

「いや、服を変えようつて継つてな

「じゃあ、付けてやるよ」

「本当かー？」

と書いて抱きついてきた

「ああ、」

「じゃあ、少し待つていてくれ、着替えてくるから」

そう書いて試着室に入つて行つた

数十分後・・・

「おまたせ」

シャツ

「・・・・・・」

俺は見惚れた。

冴子の服装は、黒のロングスカート、更に上には薄いジャケットを着ていた。

髪形はボーテール

「どうした?」

「いや、凄い似合つてるから、見惚れてた」

「／＼／＼

顔が赤くなつた

「そ、それじゃあこれにしようか

「あ、ああ

そつぱつてそのまま店を後にした。

ショッピングモール・・・あのゲームを思い出す・・・(後書き)

涼子さんの服装をcotoanageしました。

参考は漫画版の最後に乗っている麗の服装変更の所です

## 春とパートの思惑・・・

冴子と服屋を出てきて孝達と合流した後、あさみさんたちがこる。家具屋にやつってきた。

そこで見た物は・・・・

「こつまで、ここにいりやあいいんだよーーー。」

と大声が聞こえた。行つてみるとあさみさんを囲んで眞で言つてこた  
「すぐに助けが来るつて話じやつたんかよ！外の化け物は増える一  
方、おまけに電氣どころかケータイまでイカれてんじやん！」

と坊主の男が言つ

「わ、わたしあざうでもいいんです！でも、妻は週に一度病院に行  
つて輸血をさせなければならないんです」

とこうう老夫婦

「私だつて一刻も早く本社に連絡を入れないとならないんだー。」

と会社員のおっさん

「で、でも、松島巡査は助けが来るまでここ待てと言いました。  
だから・・・・」

「あんたに俺達を止めする権利はないーーーあるのは、私たちを助

ける義務だけだ！」

なんじやあこりやまるで規律なんかつちやあいない。この集団は  
すぐに駄目になるな  
と思っていると「一タが口を開く

「駄目だねこの集団は・・・」

次に孝が言つ

「これは・・・仲間割れか？」

「それならまだ良いよ・・・集団には目的がある。あの連中にはそ  
んなものない。ただ、警察の権威にすがっていただけなんだ」

「でも、皆で彼女を責め立ててる」

「頼つても意味がないと分かつたんだ。助けを待つという希望すら  
消えうせたんだ。だから、彼女を責め立ててる・・・小室、僕  
達には他人を助けてる暇なんかないのは分かつてゐる。」

「そうだ。そんなものはないけど・・・つまんないなそれじゃ

！」

「だから、面白くする。」

と言つて一人して悪戯つ子みたいな笑みで言つた。

なんだかんだいいながら、一人とも楽しんでるなーだつたら、俺も  
混ぜてもらつか

そう思いながら、一人に近づいた

「一人とも・・・」

「「な」「?」」

「これなんか、使ってみたらいつだ?..」

と書いて一丁の拳銃を出した

「これは?..」

孝が聞いてくる。

それを代わりに「コーダが答える

「M37オールウェイトだね。今、警察で配備されている拳銃だよ。  
これならいけるね」

「まあ、せいぜい楽しんでくれや

と書いて俺は呟かがった

「なんとか書いたらどうなんだー?..」

「警察なら外の化け物をなんとかしなさいよー。」

「で、でも、ほんか・・・あさみは警察学校でも成績悪かったし女  
の子だし・・・」

と今にも泣き崩れそうなあせみさんだった。そこにコータが割り込んだ

「あの～ちょっとといいですか？」

そこで、会社員が怒鳴った

「大事な話をしているんだぞ！」

「いや～落し物を拾つたんでお巡りさんに届けないとけないといけないんですけど～」

「？落し物ありますか？」

「これです。警察の銃ですよね？これ

ざわつ

コータが銃を見せた瞬間、回りの奴らは動揺を隠せないでいた

「あーはい！ そうでありますよ～ S & W M37 ハウエイト！ 紛  
れもない県警の正式拳銃であります！」

と叫びながら言った。そこに坊主の男が・・・

「おーすげえじゃん！ そいつで化け物をやつつけられれば・・・」

「でも、銃声を聞くと奴らは群がってきますよ？ 使うとかえって危  
険です。弾の数だつてここにいる皆さん的人数分しかありません」

とまたもや悪人顔で意味ありげにニヤリと笑いながら言った

「ともかくですね～お巡りさんの銃はお巡りさんが持つてないと…  
…じゃ確かに渡しましたよ」

と敬礼しながら言った

「はいー、協力ありがとうございましたー！」

と敬礼で返してお礼を言った

そして、コータが戻ってきた

「ぬふふ・・・たぶん大丈夫だと思つよ」

「かえつてまづくないか？銃をもつてたら・・・もつと責任を押し  
付けられて」

と孝が困惑な顔で言った。そこで俺が…

「昔、イギリスの軍隊じゃあマスケット銃じゃなくて槍を持つてい  
た。今でも、将校は価値の低い拳銃を持している。どうしてだと  
思う？」

と質問した。

孝は考へながら…

「うーん身を守るため…

「残念。はずれだよ。答えは集団を維持するためさ。命令に従わない奴を刺殺したり、射殺したりできる立場を形で示しているんだ！」

と俺も一ヤソと笑いながら言った

「それを話してきたのか？」

と孝が言つ。そこでコータが

「婦警さんが銃を持つての意味を想像するようになじめた。少なくとも今までよじなマジだよ」

「だつたらいいナビねー」

高城が割り込んできた

「あの連中、とんでもなく追い詰められてるのよ？それに……あの婦警に銃が使えるのかしら？」

と最もなことを言つた

「警面だから最低限の訓練は受けでこますし渡した理由は実際に撃つかどうかじやなくってですねー」

とコータが反論した。そこで孝が氣づいたように言つ

「あそここの連中も彼女が打てないとわかったら……」

「あ、可能性の話だけど。それに出合った相手をすべて助ける」と

なんてできやしないから…」「

確かにそうだよな。俺達は神様でも何でもないんだ。自分たちが生き残るために偶々、出会いただけといつ偶然だからな……

と思つていると後ろから服を引っ張られた

「ねーねー大和お兄ちゃん」

ありすだつた

「どうした? あります?」

「静香先生、エリカ?」

その「エリカ」が氣づく

「そうだよ。 静香先生は…?」

麗と冴子は「コーヒー屋にいたから」として涼さんと石井も食糧集めや荷物の点検をしていたから……だとしたら、静香先生はどこにいるんだ!?

「みんな、しずか」「さやあああ…………」

今のは静香先生! 上の階からか!

思つてみんなに言つた

「みんな! 行くぞ!」



## 「一タ、恋の予感・・・

俺達は静香先生の悲鳴を聞いて上の階に走った。

～3階寝室販売店～

寝室販売店には静香先生と食糧集めをしていた島田と二つ男がいた

「あ、あのやめてください」

「くく、そんなこと言こながら本当に誘つてたんだろ?」

「う、違うんです。私は眠くなつたりやつたりベッドがあつたから寝よつと思つて・・・」

「そんなこと、どうでもこいんだよ。ここからヤラセナリ

今にも島田は静香先生に襲ひそうになつっていた。その時――

「し、島田さん!まつであります!」

「あ? あんたか・・・」

最初に現れたのはあわみさんだった

「悪いがあんたには興味・・・!」

振り向いた島田が驚いた。無理もない自分に対して銃を突き付けられていたから

そんな中、俺達も到着した。

「な、なんだよ？俺を撃とうつてのか？」

震えた声で言った

「い、今すぐ止めてください」

カタカタ

「や」で島田は氣付くのをやつれんの手が震えていたことを・・・

「どうした？撃つんじゃないのかよ？手が震えてるぜ？」

「う、撃てるもん！」

「じゃあ、撃つてみるよー。」

と挑発をかけていた

「へんつどうすれば？」

と孝が小声で言った

すふと・・・・

ダッ！

「ータが走り出した。やに向かひのかと思えば、近くにあつた工

具店だった。

そこで、キョロキョロと覗わたして、ピアノ線とプラスチックのヤスリを組み合わせた

そして、ニヤリと笑いながら島田の背後に忍び寄った・・・・

俺も島田の前に回り警告を入れてやつた

「あんたも、氣お付けたほうがいいよ?」

「何をだよ?」

「背後にさ」

そういつた瞬間に「一タが後ろから手動の首つり機で島田の首に回した

シユル!

「グエッ!?

「無駄だよ。肉に食い込んでるからね。外すのは無理だ・・・それより、婦警さんの警告に従うか。僕に殺されるか。どっちがいい?」

そして、島田は氣を失い持っていた鉈を落とした。すかさず俺が回収した。

「フンッ!」

ドカツー・ザ・ツ

「うして、 静香先生を助けることができた。

「一階」「二階」「三階」

俺達は一回集合して今後のことを話すことになった

「どうすんだ? 孝」

「うん、 そうだな。 みんな疲れてるしちゃ……」

孝は悩んでいたが、 だが麗が……

「何言つてゐのよー危うくレイプされかけるようなといふかられる  
わけないぢやないー孝も経験してみるといわ。 マジチョなハード  
ゲイにレイプされかけたら……」

「ううううう」と反対して叫んだ。 そこで、 泳子が

「富本君。 そつぱんつても準備がな……」

「あたしの家はここから歩いて二十分なのよー」

「その二十分が一日かけてしまつともえある。 君もそれは十分に  
経験しただろ?」

「……」

汎子の言つとおり今までなら、歩いて20分もかからない場所がやつらがいることによつて迂回しなければならなかつたり、最悪、倒して進まなければならなかつたからだ。

「宮本、出発には準備がいる。準備には時間がいる。それぐらいは分かつているでしょ？」

と最もな事を言つた。そこにはコーダが

「あの～沙耶さん」

「な、なに？」

「あのEMP攻撃つて本当に全部の電子機器をダメにしちやつたんでしょうか。落雷防止の設備があるところとか、遮蔽された場所なら、大丈夫な氣もするんですが・・・」

そこで俺が答える。

「落雷防止用の施設は駄目だ。作動する前にやられてるよ。遮蔽された場所も電線とかがアンテナの役割を果たしているからな。期待はできない。まあ、核がどこで爆発したにもよるな。だけど、場所が掴めないんじゃ意味がない。」

「は～そつなんだ。」

ヒーラーが感心したように言つ

「とりあえず、車のほうは俺のがあるんだ移動に関しては心配しないでいい。」

「たしかにそうね」

と賛成してくれた高城

そこで俺はみんなに言った。

「とりあえず、必要なものはPCノート、これは情報源になるからな。探し出して損はない。後は、無線機、こいつは期待しないほうが多い。なんせみんな死んでるからな。このショッピングモールの周りの地形も把握したほうがいい。後はガソリンかな?」

「ガソリン? なんでそんなものを?」

と麗が質問してきた

「もしものためさ。奴らがいる中で給油なんかしたくないだろ? それに、今のスタンドはほとんどがセルフだから給油機自体が死んじまってるからな」

「なるほど。」

「ま、俺は提案を言ったまでだ。後はリーダーが決める」とだぜ?」

と言つて孝に振つた

「え! ? うーんそつだな・・・・・今後は大和の言つたものを優先事項にして探すことにしてよう

と言つた。すると高城が

「先にいた連中がよ」せつて言つてきたり？」

「もちろん、譲るやつ……ただし、同じものが一つ手に入つたらだけ……」

と言つた。「うわ～腹黒いな～まつそつでもしないと生き残れないからなこの世界じゃ

高城がニヤリと笑いながら言つた

「我らがリーダーの決定は下つたわ。みんな、開始して！」

「　　「　　「　　おひつー」「　　」「　　」

といつて全員行動を開始した……

（屋上）

（「一タside）

俺は、小室に頼まれて周辺の地形とどこが通れるかを調べていた。

「あそこは、ダメか……」

と言つて持つてきた地図にバツをつけていった。

すると……

「「一タさん」

「はい？」

「あいつを振り向くとちひろは中國さんがいた。

「何してるとですか？」

「あいつの辺の道を調べていたんですよ」

「へーーーか」こですね。まだ高校生なの

「いやいや、そんなことないですよ。それだったひれりの中国さん  
のほうが立派でしたよ」

「いやいや、そんなことないですよ。あれみは警察なのに市民を守  
れなくて・・・・だから・・・・やの・・・・」

何やひ言いたそつだがまつと田へいない

「あつはー？」

「本当にあつがどうぞまきましたー。」

パアーーー

「い、いやあそんなことないですって・・・」

やつぱり少し休憩がてら中國さんと話すことにした

「カレシさん」立派な警察官になつて見せられて約束したんです

よ~

「はあ～それはす」こですね～

「そんなことないですよ～警察学校つて結構厳しくて、なかなか外に出してもうえないんですよ～だから、そのカレシさんとも別れちゃって～」

と弓穂にパンパンをしながら囁つてきた

「それは・・・まずいですね～」

「あ～やつ思こますわ～」ひ見てもあせみ、結構近くすタイプなんですよ～？」

と囁つてきた。「れはまわか！？

「それは、ますます、ますます、まずいですね～」タラタラ～

「でしょでしょ？だから～コーナーを手助けしてもらつたとき～」

と囁つて近づいてきた。

その時

「お巡りさん～」

坊主の男が息を切らせながら来た

「あの、ばあちゃんヤバイ」とになつてゐる。今すぐ輸血しなこと

けないいらじこ！近くに病院があるつてよー！」

そこで、俺は行動を開始した。

### ～「データ side out～

俺と冴子は使えそうなものを探していたが、途中、お婆ちゃんの方が倒れてしまつたところでみんながいる寝室「コーナー」に来ていた。

着いてみるとベッドで寝てこむお婆ちゃんはとても昔しそうに見えた

「どうなんだ？」

近くにいた孝に聞いた

「よくわかんない。なんか難しい

「そりゃ

そういう瞬間、静香先生が思い出したよつて言つ

「…RAね」

「あ、いやそんな名前じゃあなく

「RAは略称です。不応性貧血・・・骨髄異形成症候群とも言います」

「おおー！ それですかー！」

と喜んだよつて言つておじこちゃん。するとお婆ちゃんが・・・

「『迷惑をおかけしてすいません。寝ていればすぐ治ると思つますから』

「心配しなくても大丈夫ですよ」

と天使のような笑顔を見せた。そこで俺が・・・

「天使やな〜」

とだらけていると

「大和」

後ろに嫉妬神」と冴子様がいました。

「な、なにかな?」

「だらけているわ」

「い、いや、なんの」と「スウ」「めんなさい」

「まかせつとしたが謝ることにした。だつて刀を突き付けられたら謝るしかないでしょ！？」

そう言つているうちに話が進んでいたようだ

「輸血していたのは血小板？それとも血漿？」

「セレオでは……」

「じゃあ輸血パックの色は覚えてますか？赤とか緑とか」

「黄色！黄色ですわ！」

思ひ出したよひておじやん

「R.Aで黄色の輸血パックだから、多分、R.Jだと思ひナビ……でも、電源が切れたらもう一回経つちゃうんでし……」

と悩んでいたといふ、小室が……

「あの血液型をえ合えば僕の血でも……」

「ヒヤーンー全血をそのまま輸血するのはいろいろと危険だからダメ。と言つてもおお婆ちゃんはO型だから血液型は気にしなくていいけど……」

「?.輸血する場合なら同じO型でないと……」

と言ひかけたといひでロータが息を切らしながら言つた

「ゼー、静香先生が言つてるのは血漿の場合、赤血球とは逆になるんだよ。ゼー」

おこおい、あんな息を切らせて大丈夫か？

「それもあつち系で覚えたのか？」

「あつちつてビツつかな？」

「こんな時でも漫才を忘れないとはなさすがだぜ。孝＆コータ  
と思つていると高城から質問がきた

「んで～どうしたいってこいつのよ？」

「「」の近くに病院があるので、だから取りに行くしか…」

「なんで、あたし達がそんなことを？」

みんな同じだった。他人のために行くなど死に行くようなもんだ  
からな

「だつて処置しなければならないから・・・」

そこで、孝が口を開く

「「」など、言いたくないけど、輸血はこの後も続くんですね  
？だつたら次は誰が行くんですか？」

「そ、それは・・・」

「ルールが変わった・・・か」

冴子が呟くよつて言ひ

しゃーないこ「」はこいつも行きますかね～

「だからどうした？」

「大和？」

「要は、このばあちゃんの輸血パックを取りに行けばいいだけなんだろう？」

そこで、高城が怒鳴るように言つ

「それができないから。言つてるんじゃない。第一私たちは他人を助けてる暇なんか…」

「だったら、ありすと京さんはどうなる？あの二人は途中からチームに加わった。もし、あの時助けていなかつたら、外にいる連中と同じになつていた。もし、他人を助けている暇なんかなかつたら、俺達はすでに生き残つていなかつただろう。」

そう。他人なんか助けずについて言つたら俺達はチームを組む前に全滅し奴らの仲間になつっていたであろう。他人を助けることは今の世の中じやあ偽善かもしけない。だからこそ、助けることによつて自分たちの精神が保たれているのではないだろうか

「それに、俺らには十分つていつほど武器があるじゃあねえか」

と言つて自分の背後を指差した

それを見た。孝は・・・

「なるほどね・・・よし、取りに行くとするか！」

「あーじゃあ、本官も連れてってください。」

「俺も行くぜ。」

とあをみさこと坊主の男が言った

後は、俺、孝、コーダ、計5名で行くことになった。・・・

## 輸血パックだ！？

ショッピングモールでおばあちゃんが倒れて輸血パックが必要になつたので俺とコータ・孝・あさみさん・田丸さん（坊主の男の人）の五人で向かひことにした。

そして、ショッピングモールからストライカーで移動し、目的地である病院付近まで来た。

（川嶋病院付近）

「あそこか・・・小坊の頃診察してもらつたな」

と孝が言つ

「お前もかよ？」

と田丸さんが聞き返す

「あなたもですか？」

「あそここの先代、マンガ好きでなマンガ喫茶並みに揃つてたからな

と笑いながら言つた

「あ、あのお話の途中ですが・・・」

「あーはーはー。にしてもずるこな銃を隠し持つてたなんて

実は田丸さんには銃を隠し持つてゐることをばらした。

するべく、ロータが・・・

「撃つてみますか？奴らが群がつてきますから・・・」

「冗談はよし！」ちやん！俺はハンドガンマニアだぜ？認めのならオートマグロック一九、マグナムなうテザートイーグルだな！」

と叫つたので俺は

「ありますよ？」

「え？」

「だから、ありますよ。やの、ひとつも」

「マジですかー？」

「ええ、」

と叫つてベビロンからやの一つの銃を出した。

「おおー、じつから出したー？」

「それは・・・企業秘密とこい」とで「ればやの呪しあげますよ」

やつぱり田丸さんに譲つた

「あつがとうー！」

そう話してゐるうちに病院の方に到着した。

回りは塀で囲まれていたので正面の方をストライカーで塞いだ

「よし、これなら奴らが来ても入つてこれないだろ?」

「さすがだね!大和」

とロータが誉めてきた

「ありがとうよ。さて、これからが問題だ」

そう言つて病院の方に向き直つた

そこで孝が

「いいか、自分で絶対駄目だと思つた時以外銃を撃つな。静かに事を進めるぞ。」

皆で確認した後、病院に突入した。

（病院内）

中に入つたが、案の定誰もいない。

俺達は物音を立てないように静かに奥へと進んだ

その時!

ギイイイイイ

と扉が開いた。一瞬びっくりしたが何もなかつたみたいなので奥へと進もうとした。しかし・・・

ガシャアアアアアアン－！－！－！

アアアアアアアア

大量の奴らがさつきの扉から飛び出してきた－！

「そら－－！」

俺は即座にバビロンから鎖鎌を出して奴らの首を根こそぎ切り落とした。

しかし、受付台から一人飛び出してきたがコーダが下から銃剣で突き刺した。

そこから、慎重に中に入った。すると・・・

アアアア

「いじもかよ－！」

と田丸さんが突っ込んだ

「そんなこと言つてないでわつたとやつつけましょー！」

と孝が言った

俺も武器を変えて、妖刀・村正に変えた

「おひーーー！」

ズバッ！-

あつとこう間に殲滅した。

「よし、わつわと目的の物を探し出しちまおう」

と俺が促す

すると・・・

「あつた！黄色の輸血パック」

と「一タが見つけてきた。

「いっちはいろんな薬を見つけてきたぜー！」

と田丸さんがその他の物を見つけてくれた。

「よし、これで目的の物は見つかった。わつわと出よー！」

と孝が言った。

そつとつて病院を後にしたのだが・・・・・

アアアアアアアアアア

正面にはストライカーを壁にして道路側には大量の奴らがいた

「ひっぱー・・・」

とあさみさんが言つ

「どうすればいいんだよーー?」

と困惑したように言つ孝

「どうする? 小室」

ヒータが聞いてる

「今、考えてるー。」

「どうしようかなー? あつーたしか、ストライカーの中に・・・

「なあ、ちょっとといいか?」

「どうしたんだ? 大和」

「いや、ストライカーの中にある物があることに気がついてな

「ある物?」

「ああ、今回はそいつに賭けてみないか?」

「・・・・分かった。賭けてみよう」

よし、我らがリーダーの承認は取れた。後は実行するだけだ。

そう思つて、屋根から中に入った

「ストライカー 内部」

「えーとこの辺に確か・・・・」

あつたはずなんだよな~俺の家からずつと入れっぱの奴がいつか役に立つだろうと思つて入れておいたが正解だったな。

「おつあつたあつた」

と言つて一つの袋を取り出した。

そして、皆のいる場所に戻つた

「大和、何しようつての?」

と「ゴータが聞いてきた。

「まあこいつを見てくれ」

「「「「？」？」」

袋を差し出しだがみんな分かつてないようだ

「正解は火炎瓶だ」

ニヤリと笑つた

「火炎瓶？そんなもの・・・あ！」

コータは気づいたようだな

「これはどうしようだ？大和」

と孝が聞いてきた。

「一つ、貸してくれ」

そう言って一つの瓶を受け取り先端にある新聞紙に火をつけた。

そして、俺は叫びながら投げた

「汚物は消毒じゃ――！」

ひゅうひゅう

バリン！ボワッ！！

アアアアア

投げた方の奴らは燃えながら倒れていった。

「すごい・・・」

と孝が言つ

「大和、僕も手伝うよ」

と笑いながら来た

「よし、もう一度行くぞー!」

と数分にわたり消毒活動をした。

奴らはほとんど全滅した。

そして、俺達はなんとか脱出しショッピングモールに戻った。

ショッピングモールの休憩室

「あ、なんとか終わつたな」

「そうですね」

今、休憩室には病院に行つた五人が休んでいた。おばあちゃんの方はなんとか間に合つたようだ

「こしても驚いたぜ」

「何がですか？」

「いや、お前らが良くなき残れたなって」

「ああ、それは・・・」

孝は俺に振り向いて

「全部、彼のおかげのよつたものですから」

「なんと、俺のおかげって言つのか？」

「孝、一つ間違つてゐるや」

「え？」

「俺は、あくまで銃や車両の手配をしたまでだ。実際に行動できたのは孝お前のおかげなんだよ」

「僕の？」

「ああ、自分じやあ自覚してないだらうがな。それぞれの役割を把握しつまく使つてくれる。まさに適材適所といふべきかな」

実際にそうだ。自分の役割も分からずに行けばどんなに強い武器を持とうがあつといつ間にやられちまつ。戦争でもそつだ。つまご指揮官ならばそれぞれの分隊を確實に使える。

それほどまでに孝はつまくなつてきてこるので

「や、そうかな？」

と苦笑いしながら言つた

「まあ、そんなに頑なにならなくていい。ただ単に呪をつまく使

つてくれつて」と。俺も含めてな・・・

「大和、ありがとう」

「気に入んな」

そう言つて肩をたたいた

「わん！わん！」

といきなりジークが吠えた。見てみると窓越しに何かに吠えている  
ようだ。

「どうしたんだろう？」

とロータが言つ

「行つてみるか」

そう言つて全員で行つてみた。そこには・・・

人間が追い込まれた時の行動

俺達は休憩室で休んでいたところ、ジークがいきなり窓に向かって吠えだしたのでジークの方に行つてみた。

あると

「なんだ、何もないじせん」

と俺が言う。外には数体の奴らしかいない。しかし、ジークは未だに吠えている。なんでだろうか？

お、おいかれ。・・・

と孝が指さした方向を見た。そこには一体の奴ら化した婦警だった。

すると、突然

「あ・・・あああーー!」

あやつさんが声を出した。

「あやつせん。ど、どうしたんですか？」

コータが聞く

ばいいいいいいいいいい

なんと、あれは彼女の先輩で東署に応援を呼びに行つた人だつた。

「な・・・なんで・・・ほ・・・本署に行けなかつたんだ！――  
・・・出た後、すぐ奴らに襲われちゃつたんだ！――！・・・・・  
だれも・・・・誰も助けになんて来ない！――！」

ダン！ダン！

窓ガラスを叩きながら大声で泣き叫んだ。そして・・

「むつ・・・・・むつむつむつーーーーーーーーあ・・・・・あわあひな・・・・・

と独り言に様に言い始めた

「あやみさん！！」

コータが彼女の名前を呼ぶ

「『ピータ』……せん……あれ……あれふ……ちがうの……あれ……」

ダッ！

とうとう恐怖を抑えきれなかつたのか。屋上へと走り始めた

「ねわあれんー！」

「コーダが呼びとめる

「エリエベツモ「今セハ、ニコ人ふらないでよ……メガネブタ  
…………」「

「あさみは・・・あさみで・・・・・あさみなんだから――――  
――」

ダツ！ダツ！ダツ！

そう言つて走り去つた

あさみさんが走り去つた後、俺達は（平野を除いて）急きょ会議を行つた

「あの婦警はもう当てにならないわ――いや、警察自体が・・・・・

高城が今の警察の状況を言つた。

確かに、今この状況下で警察がまともに機能していなことベラ  
分かつていた。

「確かに、ここはもう出た方がいいと僕はそう思つんだけど・・・・・

「

と言つてコーダの方を見た

「ああ、今ままじやあこいを出るとか変な後悔を残しちまうかも  
しれんな・・・それに、コーダがあの状態じゃあ、まともな戦力  
にならん。だから、孝、お前が何とかしてやるんだ。リーダーであ

る。お前が・・・」

と俺が言つ

「ああ、分かつてゐる。なんとかしてみるよ」

会議の結果、出る」とこなつたのだが・・・・その前にコータを  
どうにかしなければならぬ。そこは孝に任せしかない。それで  
も駄目なら俺が何とかしてやる。その後、残つてゐる生存者の様子  
を見に行つた。

（寝室販売店）

俺は見えないよつて影からひそかに見つめた

「救援を呼びに行つた婦警がやられたんだ！」

と会社員のおひさが言つた

「我々は警察に守りられるべきなの！」

なんだよ？結局は警察に押し付けて自分達は何もしないつてか？ど  
こまで都合いいんだよ・・・・

「け・けしからん！最近の警察はたるんじるーー」

「い、これがひじつしたらここによー？」

「安全な場所を探すんだ・・・」

「安全な場所つてば？」  
「？」

「やつやあ警察とか・・・」

「でも、そこまでどうして行けばいいんだ？車は動かないし、歩きだとあのおばちゃん婦警みたくもられるし・・・」

警察が黙田になつてゐるのにまだ、頼ろうとするのかよ・・・もつと頭使えば分かるだらこのバカチン共が・・・も

「あの学生達よーあの子たちと一緒に行けば・・・」

おひおひ、今度は俺達を頼りひとつてのか？そりやあ警察署には行かなきやいけない理由はあるけどよ。なんであんたらのお守までしなきやあいけないんだ？

「無駄だらつ」

島田が静かに言つた

「あいつらは自分たちの都合でしか動かないぜ・・・こんな世の中になつてしまだそう時間は経つてねえ、なにこ、銃を握つて好きなようにしてゐんだ」

「強姦も止めたけどねー」

「んだとー?このババア！」

と言つて争つていた。

「最近の若いもんはたるんビハーニー...」

「何ぼやこひんだよ。ジーさん」

そして、会社員のおっさんがいつ

「とにかく、安全な場所にだな・・・」

「そんなもの必要あんのかよ?」(こは)食料や水はたくさんある。  
それがなくなつてから慌てても「こいんじゃないか?」

「足らないのは女だけだもんね・・・」

「んだとー?」

あ～あ～これじやああつという間にやられまつた。こんな奴らと一緒に巻き添えは食いたくなこさつせじ出がもうのがいいかもしけんな・・・

俺がそう思つてると、今まで黙つていた少年が言つた・・・手に包丁を持ちながら・・・

「死ぬんだよ・・・みんな死ぬんだ!!」そして、みんなあの化け物になる!」

あ～とうとう壊れちまつたか。あんなのがいるといつりまで被害が被る、何とかして静かに出たいな

「あのよ～俺達まで入れないでくれよ」

「俺は、人を食う映画のファンなんだ！だから分かってる！あの高校生達も駄目だ！銃があつてもすぐやられる……どうにもできない……どうにもならないんだ！！！ヒヤハハハハハハ！！！」

俺はその声を後に、その場を去った。

（休憩室）

俺は皆の所に戻った。

「汎子」

「大和かどうした？」

「ここは完全的に駄目だ。さつきあつちの生存者たちを見てきたが、酷くなる一方だ、早めに出た方がいい。」

「そうか・・・でも、平野君が・・・」

そういうて平野の方を見た

「まだ、駄目なのか？」

「ああ、あれからずっとだ」

「しゃーない

「大和？」

「おれが何とかするよ」

そつまひで「一タの方に近づいた

「一タ」

「あ、大和・・・」

「お前らじくもないな」

「だつて・・・・・」

「俺らは仲間だろ?そりぢやないのか?」

「それは分かつてゐ!!--でも・・・」

「それなら、後悔しないうちに行つて來い。こゝはすぐに駄目になる。お前が引きずつてたら、それは、崩壊を意味する。分かるな?」

「・・・・ああ

「だつたら、行つて來い!!--そして、自分の力でどうにかして見せろ!」

「!!--・・・・・ありがとう、大和」

「気にはすんな。軍オタ仲の俺たちじゃあねえか

笑つて肩をたたいた

「じゃあ、行つてくる!!--

ダツ！ダツ！ダツ！

「これで、後悔なく行けるだろ？・・・・・

そう思つて皆の元に戻つた

すると・・・

「なあ、大和。平野になんて言つたんだ？」

「ああ、後悔ないようにって軍オタ仲の言葉を言つただけさ。それ  
より・・・・・」

「なんだ？」

「もう一人、増えるかもしれないぜ？」

ニヤリと笑いながら言つた。

「さて、俺達にはすることが山ほどある。リーダー、指示を

「・・・・・ああ、分かった」

そして、行動を開始した。

「……………」

「コータさん……」

俺は、大和に後押しされあわみさんがいる屋上に向かっていた……

「屋上」

屋上に着くと体育座りしてあわみさんを見つけた

「あわみさん……」

「え？ ……コータ……さん？」

「一緒に行きましょー！」

俺は率直に思いをぶつけた

「え？ ……その、うれしじゃなくて……そのあわみさんもつね巡つさんの仕事できなこからだからコータさん……でもコータさんが……」

「いろいろ聞いてこるようだ。だから、俺は、笑ってあわみさんを見た

「連れてつべぐだせ……あわみ、コータさんと一緒に行  
きたいです……！」

「ガシッ……」

そう言つて俺に抱きついた

良かつた・・・本当に良かつた・・・

やつ思つてこない・やめとけと思ひや

「なめんじゃねえええええええ！」

— ! ! ! —

突然屋内から怒声が聞こえた

「モーダさん！！」

「行きましたよーー！」

そう言つて再び屋内に戻つた

Sides out }

なめんじや ねえええええええ！――！」

俺達はいきなり響いた怒声にビックリしたが、すぐさま聞こえた方に走った。

途中、コータ達と合流し、再び向かつた。

家俱販売店

そして、着いてみるとさつきまでイカれていた青年が腹部を抑えな

がら呻いていた

「こひえよおおおお

「おい、どうしたんだ！？」

俺はすぐ近くにいた会社員のおっちゃんに聞いた

「ここの青年と少年が言い争つてな。そしたらこいつの持つてた包丁を取つて刺したんだよ……」

慌てながら言つた

「それで、もう一人の方は？」

「それが……刺した後、どっかに行つちまつでよ」

ともう一人の兄さんが言つた

すると……

アアアアアアア

「…………」

急いで店出て一階の方を確認してみると奴らが入ってきていた

「は・・・入つてきやがった」

と会社員の兄ちゃんが言つ

「おい！…手伝え！」

島田が声を出す

「ど、どうすんだよ？そんなもの・・・」

「バリケードを作る。一階はあきらめる！…！」

そう言つて、他の人達に手伝わせた

俺は高城の方を見る。

そして、孝が聞く

「どうだ？」

「無理！人手も時間もない。まずは、一階の非常階段！」

「それと、避難ハシゴだな。どうする、リーダー？」

そつ言つて孝の方を見た。

「僕と田丸さんで先頭に立つ！殿は平野と大和だ。本当に危険な時以外撃つな！」

「ほほう、様になつてきたね～我がリーダーは・・・・なら、ちゃんと務めを果たしますか

「お、おこ俺達はどうぞつやあいいんだよ！？」

と若い兄ちゃんが聞いてきた。すると・・・

「自分で決めてください。なにもかもおわっ・・・変わったんです。だから決めてください。あ、あさみも自分で決めました。もう警察面はやめです。」

とあさみが叫びてきた。

れいわとほまるで違うな。ずいぶんと様になつてゐ

やつ思つてこると涼子が動いた

「懲ごとこう」

グサッ！

「むねや・・・時はない！..」

そつ言ひてHスカレーターから上がってきた奴らを切つた

「行くぞーー！」

孝の号令と共に動いた

当初は静かに出るつもりだったが・・・予想外の展開になつちまたな。

先にいた連中は屋上に立てこもるか、一緒に逃げるか迷つてゐるみたいだ

「あたしたちはどうなるのよ……」

そこで孝が答える

「知ったこっちゃない」

普通なら非道とも言えることだがこの状況になつては関係ない。生き残るためにしていることだからな

「知ったこっちゃないっておいー」

「けが人だつているんだぞー!？」

俺は静香先生の方を見た。

「大丈夫、大事じゃないわ。」

「だとよ。一緒に来るのか?」

「俺も一緒に逃げるぜ。ここに居てもどうしようもないしな

と言つて島田さんが来る」とになつた

「それで?あんたらはどうするんだい?」

「わ、私は屋上に立てこもる」

「私も……」

と言つて島田さんと田丸さんとあやみさん以外は屋上に残る方を決めた

「だつたら非常階段までは援護してやるよ」

俺はニヤツと笑つて銃を見せた

そして、汎子が言つ

「急いで方がいい。奴らは待ってくれない」

～非常階段付近～

俺達は何とか非常階段付近に来た。先頭はコータとあやみさんが行つた

後方は俺と汎子で守つている

「どうしてもいかないんですか？」

孝が最後にもう一度聞いた

「やっぱ挑戦とか冒険は性に合わねえわ。じゃあなー」

「い」武運を

そう言つて残り組は階段を昇つた

孝の方を見ると少し寂しそうな顔をしていた

だから、俺は言った

「孝、彼らは自分たちで決めたことだ。それを曲げるわけにはいかない。それに、すべてを救えないとは前にも言つたろ?」

「・・・ああ、分かつてる。それより今は・・・」

「ああ、いかに脱出するかつてことだ」

そう言つて駐車場の方を見た。

ストライカーなどは入り口付近に止めておいたのだがここからだと若干、遠い。それにこの大人数じやあ静かになど100%できるわけではない

「大和、どうする?」

孝が聞いてきた

「そうだな、高城」

「ええ、まず、先頭に孝・宮本。左に私と島田。右に大和・毒島先輩。後方にコータとあさりさん。中心に静香先生・ありす・京さん。その護衛に田丸・石井が付いて」

そこで、俺が付けたす

「CJのフォーメーションは絶対維持、ベトナムやイラクで米軍がトラック輸送部隊を護衛する時と同じだ」

「分かった。皆もいいな？」

全員が頷く。

そして、行動する

（駐車場）

俺達は何とか静かに移動してストライカーに後づりとつてひと殴りで・・・

「たすけて――――――！」

声のする方向をみると少年がバンの上から助けを求めていた

「非常口、開けたのあいつだな」

と孝が叫び

「ああ、やつだらつよ。だが、自業自得だほつとくわ」

と俺が言つたが・・・

「そんなんひどいですよー大和さんー。」

反抗したのはあさつせんだつた

「あいつ自身を助けていたら、いつまで被害を被つまつ。そんのは『めんだ』

そつ。前にも言つたと思つが、いちいち助けなんか差し伸べていたらそれこそチーム全体を破滅へと導いてしまう

「だからって…」

「あさりさん

「ロータが呼びかけるが…

「いりなつたら、私が助ける…！」

やつて少年がいる方に走つて行った。

「あ、あさりさん…！」

「ロータも行こ」としたが

「待て、『ロータ』

俺が呼びとめた

「なんで、止めるんだよ…！」

「お前まで行つたら戦力が減るだろ？」

「でも…」

はつなんで俺つていつもこうなんだつな

「お前が行く必要はない。代わりに俺が行ってきてやる

「大和、なんで？」

「性分つていうのかな？まつ俺が原因だし……」

そつ言つてると涼子が近づいてきた

「大和」

「悪いな。一生のお願い……で使っていい？」

「ふつそれならば必ず帰つて来い」

チユツ

そつ言つた後、俺達はキスをした。周りがどう言おうが関係ない

「ハツじゃあ、行つてくる」

「ああ

そつ言つてあさつさんその後を追つた……

～少年がいる車付近～

俺はなんとかあさつさんを追いついた。

「あさつさん……」

「や、やまとやん……？」

「やるなの後回しです。今は田の前の事に集中して貰いたい。」

「うつ置いてバビロンからミ60を出した

「オラオラオラオラオラ……」

「オラオラオラオラオラオラ……」

近くにいた奴らは細切れになつた。

「ああみさと、ショットガンは使えますか！？」

「は、せー！」

「じゃあ、これを使つて貰いたい。」

セツ置ひてバビロンからミ870を出し渡した。

しばりく撃つてほこいたもの、奴らはどんどん集まつてくる。バリバ  
ればー？

俺は撃ちながら一つの手段を取ることにした・・・。

「ああみさとー。」

「は、せー？」

「やーの車の屋根に昇つてくれださー。」

そう言つて近くのバンの屋根を差した

「わ、分かりました。」

そう言つて屋根に昇つた。

それを確認した後、俺はあれを出すことにした。

これら、広範囲に奴らを倒せるぜ

左手を上げり、語った。

「ゲート・オブ・バビロン（王の財宝）……」

そう言うと空が赤く染まり中から無数の武器が出てきて・・・・

「よし、ねわあれん。やへいいである」

「え？ わあす」

あつといつ間に倒せたことに感動していた。

「それから、その少年、もう逃げていこう。ただし、俺達に付いて来るな。」

殺氣もこじつませ言つてやつた

少年は叫びながらどこかへと行った

「や、大和さん、」

「はい？」

「あ、ありがとうございました。そして、ごめんなさい」

「どうして、謝るんですか？」

「だつて、あわあわひや、酔いじと酔ひぢやいました。」

「ああ、気にしないでいいですよ。それより嘘のとこに戻りましょ

「・・・・・はい！」

そう言って俺とあさみさんは孝達の元に戻った

→ストライカーが置いてある場所)

「皆、今戻つたぜ」

「大和！」

ガシッ！

「おおつと冴子、いきなり飛びつくなよ」

「仕方ないだろ？愛する人が無事に帰ってきたのだから」

「まあいいか。ただいま冴子」

「お帰り、大和」

そう言って抱き締めあつた

「お~い一人とももうそろそろいいかな？出発したいんだけど」

と孝が言つてきた

「悪い悪い。それじゃ あ出発するか」

「「「「「「心一」「」「」「」「」」」

こうして、俺達は地獄のショッピングモールから脱出する事が出来たのだった

## 宮本の家

ショッピングモールから脱出した俺達は宮本の家に移動していた。

移動の際、それぞれの車両に移動した。

ハンヴィー

静香先生・麗・孝・沙耶・田丸

ストライカー

俺・冴子・京・ありす・ジーク

M939ガントラック

島田・コータ・あさみ・石井

といづ形で乗っていた。

数分後・・・

キーツ

前のハンヴィーが停車した

「こじがそうなのか?」

「ええ、」

一軒の家の前に止まつた俺達、突入班は決まつていた

突入班

麗・孝・冴子・沙耶・田丸

の五人で突入することになった。俺はストライカーの整備があつたため残ることになった

「それじゃあ、気お付けろよ」

「ああ、分かつていい」

そつと麗達は家の中に入つて行つた

「さて……と」

俺はストライカーの整備に入ることにした

まず、固定武器として30mm機関砲を取り付ける。

こいつは、コンピューター制御で自動的に撃つてくれる便利なものだ。もちろん弾無限

それから横に大型の荷物入れを装着する。これは幅が大きくなるが、その分容量がいい

と整備をしていると……

パン！

麗の家から一発の銃声が聞こえた。きっと手遅れだったんだろう

俺は次にハンヴィーのまづに手をつけた

固定武器は、M2キャリバー

そして全体を装甲板で覆つた。これなら多少の衝撃は抑えられる

そして、麗たちが家から出てきた。

麗は無言のままハンヴィーに乗つた。俺は沙耶に声をかけた

「間に合わなかつたか・・・・」

「ええ、彼女の母親はすでに奴ら化していたわ。とじめは麗自身が・  
・・・」

「そつか・・・・孝

「なんだ？」

「彼女を支えられるのはお前だけだ、傍にいてやれ」

「ああ、分かつてゐる」

そつとつてハンヴィーに乗り込んだ

「これからどうする？」「

俺が沙耶に聞いた

「丁度、Iの近くに警察署があるので、とりあえずそつぱに行つて、麗のね父さんも探してみましょ。」

「Iへひきこまいなかつたのか？」

「ええ、彼女の母親以外にも複数いたけど、どれも違つたみたい」

「そうか。まだ希望はあるんだな」

「ええ」

やつぱつて今後の計画を話し始めた

（孝 side）

僕は麗が気になつてハンヴィーに乗り込んだ

「・・・・・」

乗ると麗は俯いたまま無言だつた

「麗」

「・・・・・なに？」

「お祭りの」と残念だつた。

「ええ

麗は完全的にダメになつたのかもしれない。だから僕は・・・  
ギュッ

「孝?」

「今、泣いとけ。後悔が残らないよう」「・・・・・

「う・・・・・う・・・・・あり・・・・・がと・・・・・

その後、麗は思いつきり泣いた。

数分後

「孝・・・・・ありがと」

「気にするな。麗が悲しむところは見たくなかったんだ

「ふふつありがとう」

そう言つて僕と麗はキスをした

（孝 side out）

あれから俺たちは移動を開始した。

（ストライカー 内部）

「さて、警察署はどこつてるかね」

俺が言った

「恐らくは機能していないだろ。」

汎子が答える

「でも、生き残りぐらいいて欲しいね」

「確かにな」

そう言ひ合つてると無線から

「大和、すぐ近くに銃砲店があるよ」

相手は「一タだった

「本当か?」「一タ」

「うん、あたみさんが言つてたから間違いないと思つよ」

「せうか、ハンヴィーの方は誰か知つてるか?」

ハンヴィーの方に聞いてみた

「パパに聞いたことがあるけど、でもどいつもするの?」

「決まってるだろ? 弾集めや」

「分かつたわ。行つてみましょ」

そして、進路を変更した

（銃砲店前）

俺達は銃砲店の前にいた。店自体はシャッターが閉まっており、きっと店主がここで閉じこもっていたんだろう

店の周りには奴らが数体いた

車両の方はエンジンを切り待機していた

そして、無線で役割を聞いた

「孝、どうする？」

「そうだな。大和とコータはこっちの専門だからな一人が行ってくれ

「分かつた。後、二人ぐらい連れてつてもいいか？」

「ああ」

「よし、とりあえず

「冴子、行けるか？」

「ああ、心配しないでくれ」

そう言つて刀を差しながら言つた

「よし、コータ」

「なに?」

「島田さんも連れて」「」

「どうして?」

「」「の内で一番力持ちだ」

そう、いくら銃を撃つていてもコータや俺でも弾を大量に運ぶとなれば相当の力がいる。そこで大工をしていた島田さんの登場つてわけだ

→銃砲店内へ

ガラガラ～

周りに注意しながらシャッターを開けた。中は思ったより広く、いろんな銃が置きっぱなされていた

「結構残ってるな～」

「そうだね。」「の店主、急いで避難したみたいな感じだね」

よく見てみると、奥の方が書類や備品などが荒らされていた

すると・・・

アアアアア

奥から奴らが現れた

俺はバビロンから槍を出して静かに殺した

ザシユツ

「相変わらず、見事だな」

「やうやく誓めるな。よし、手分けしてあたりを探すか」

「「「分かった」」」

そつと手分けで探すこととした……

おま、発見――！

俺達は、麗の家を出た後、警察署に向かうことになっていた。しかし、途中銃砲店があつたためそこに寄つていいくことにした

（銃砲店内）

俺達は慎重に弾薬探しをしていた。

俺は今、「コータと行動している。

「コータ、そつちは何か見つけたか？」

「いや、まだ、セシリジアうに書類みたいなのは、落ちてないね」

「コータの言ひとおり、セシリジアうに書類が落ちていた。きっと店主が慌てて避難したことを見える。

「しかし、妙だな」

「せうだね。こんなにも銃があるなんて」

確かに、普通、外の連中があんな状態なのは見ているはずだ。なのに、銃どころか薬莢までないとはどういうことだ？

何か臭うな……

そう思つていて奥の部屋に突入した。中は表と比べてきれいなもんだ

「クリア」

と「コーダが安全確保を宣言した

俺は////軽機関銃を下ろした

「よし、何かないか探つてみよう」

「そうだね」

そつとつて搜索を開始した。

数分後・・・・・

「！大和！」

「コーダが何か見つけたらしい

「どうした?」「コーダ

「これ見て」

と言つて指差すところを見た。床の所に何か擦れたような跡があつた。しかも、扉みたいな擦れ後だつた

「コーダ、この後ろに何かあるぞ」

「分かつてゐる。きつとこの中には・・・・・」

銃である」

「でも、どうやって開けるの?」

と「一タが聞いてきた

「そりゃあ、決まってるだろ。どこかにスイッチがあるはずだ

「じゃあ、探してみよ!」

また、捜索を開始した。

すると・・・

「大和、あつたよ!」

「よし、押してみる!」

「うん!」

ポチッ

しつん

「あれ?」

ガーン!

「ぎゃあー?」

「コーター！？」

コータがスイッチを押したと思ったたら、扉は開かずコータの頭上に何か落ちてきた

「大丈夫か！？」

「うん、大丈夫、でも何が……」

と言つて辺りを見回すとそこには…………

「タライ？」

大きなタライがあつた

「ドリフカ！！」

俺は思わず突っ込んだ

「大和、何言つてるの？」

「氣にするな」

そう言つて再び捜索した

すると……

「おつ？これが？」

ポチッ

ギイイイイイイ

「大和！」

「ああ、分かつてゐる」

今度こそ扉が開いた。中を覗いてみると・・・・・・

「ハーザットホー―――ラ――・・・・・・・・

コータが乱舞した

「ハ、これはすごいな・・・・・・

俺も思わずつぶやいた

中にあつたのは軍オタには堪らない。宝庫となつていた

「ハ、これは！？スパス12！生産が中止になつた自動ショット  
ガンだよ！！」

あ～～あまた、始まつたよ

「AK47アサルトライフル！！ソ連が作り出した最高の銃だよ！  
！こつちにあるのは、 RPG-7、ロシアの対戦車ロケットランチ  
マーだよ！！」

とコータの銃講義が数十分に渡つて行われた。

そして・・・

「気が済んだか?」

「い、いぬこ

俺は、店内に散らばっている皿を呼びに行つた。そして・・・

「おこおこ、いじま日本か?」

と島田さんが叫つた

「いじの店主、こんなところ離してあつたとはな

後から、田丸さんも無線で呼んだ、いじの店主とは知り合ひだつた  
よつだ

「それじゃあ持ち出しますか。あつ弾薬類だけでいいですよ。銃器  
は俺が持りますから」

「おこおこ、こくらお前さんでしのこの数はさすがに・・・

「大丈夫ですか

やつぱりバロンを出した

「・・・?」

島田さんは驚いたよつだ

「なんだそりゃあ」

「これが、俺の特殊能力ですよ。武器類は持ち運べますから」

「ふうんそいつは便利だな」

島田さんは感心したよつに言つた。

その後、全員で弾薬類を運び出し、店に残っていた銃もいただく事にした。

そして、出発を開始した。

（警察署付近）

俺達は警察署付近まで来ていた。

先頭はストライカーだ

しかし、田の前には

アアアアアアアアアア

大量の奴らがいた。それも警察署を田指すよつに・・・

「奴らでいっぱいだな。」

冴子が言つてくる

「そうだな。でも、こっちに反応しないつてことは・・・」

「中に入人がいるといつ証拠だな。」

すると・・・・

パン！パン！

「一今の音は・・・・」

冴子が反応する

「ああ、間違いない、生き残りがいる」

俺が応える。そして、無線機で

「みんな！聞いてくれ！たつた今、発砲音を聞いた。これより警察署に突入し中にいる生き残りを救うぞ！――」

「「「「「「「了解！――」「――」「――」

いつして、突撃を敢行した

おまけ、発見……（後書き）

「は～い、作者で～す」

「大和だ」

「いや～もうすぐ、警察署に着くね」

「ああ、やうだな」

「中には誰がいるのかな～？」

「そりゃあ、警察の人間だわ」

「そりゃあやうだけどさ、もつと特殊な人達だよ」

「？？」

「まつそれは、次で楽しみにしてね～。それはそつと・・・・・

「どうした？」

「大和と冴子のラブラブシーンが書けないよーーー！」

「ぶつ……お、お前何言つてんだ！？」

「いや～そんな照れなくていいよ～大和君。俺も冴子さんの」とは  
好きだから」

「…」アラウドが口を閉じた。

「いいよな」冴子さんと付き合えて、俺も冴子さんみたいな人と付き合ってみたいよ

「おまえ、ちよつと黙つていろや」

ガチャン！

「え？ ちよつ・・・・・まつ・・・・・」

fire! !

一  
北草集卷之三十一

ドナツ

最後にRPG!!!!

バシュウ！！！

ドカーン！！！

—あ——れ——！——！」

「汚ねえ花火だ・・・・・それじゃあ、気を取り直して、次回！ついに大和と冴子が○○○だ！絶対見ろよ！つて作者あああああ！！！！！出てこおおおおおおおおい！————！バラバラに

してやる……」

え、上のは遊びなので気にしないでください。

では、次回もよろしく……

警察署（前書き）

あの二人組が！？

俺達は麗の親父さんがいる警察署を田指した。そして、警察署に着く寸前で銃声を警察署から聞いたので、突撃を開始した。

「南 side」

私たちは洋上空港からなんとか脱出して、警察署に辿りついた。

パン！パン！

「リカ、どうするよ？」のままじやあ弾が尽きた。

「こいつは田島、私が SAT 配属されてからずっと一緒にいる相棒だ

「とりあえず警察署に入りましょう。弾ぐらこなら残ってると思つし」

「よし、どちらかが残らなきゃな」

「やうね・・・」

「「ジャンケン・ポン！」「

この方法は私たちが最初に決めた“ルール”だった。

今では馴染んでるけど・・・

「かーつまた負けかよーしゃあねえ！一急ぎで頼むぞー！」

「ええ！ わかつて・・・」

いぬわと答えよいつとしたとき

ブオオオオオ！-！-！-！

— T. T. T. T. T. T. T. —

アアアアアア

一  
リカ！  
」

ええ、生存者かいだみたいね！」

そう言いながら再び奴の方に銃口を向けた

{ 南 Side out }

—よし！置、突き込むぞ！！

俺が無線で叫ぶ

——了解！——

残り一台の答えが入ってきた

「おしゃれ!!!!ストライカーの本領発揮だぜ!!!!」

そう言ってコンピューターを操作してストライカーの固定武器30

m m 機関砲を奴らに向かって

「撃て――――――！」

アアアアアアア

奴らは弾をくらつて細切れになつていった

「金輪際、固世武器を使え!」

そう言って、道路にハンヴィー、ストライカー、ガントラックが横に並びそれぞの固定武器を使用した

（ハンヴィーの固定武器）

（ガントリックの回復装置）

(スエ)スイガニの固(クモ)器

そして、辺り一帯は血の海となつた

「気持ち悪い」

俺が感想を言った

「良くそんな」とが言えるな

冴子が言つてきた

「だつて、さすがにね？」

「今まで、散々やって來たくせにか？」

「・・・そこは突つ込まないでくれ」

「まあいい、それより生存者は・・・」

そう言つて冴子がふたを開けて望遠鏡で眺めていた

「いたゞ。二人だ」

「警察関係者だらうな。よし、そつちに行つてみよう

そつ言つて警察署の前に移動した

（警察署前）

警察署の前に止めると一人の男女が出てきた

「警察特殊部隊SATの南リカです。しつちが・・・」

「田島だ。よろしく!」

そつ言つて敬礼した

「俺は藤見学園2年B組の小田原大和です。」

「藤見学園ー?」

リカさんが学校名に反応した

「どうかしたんですか？」

「いや、その学園の校医が私の友達なのよ・・・」

「ああ！ 静香先生ですか？」

「セウー。」

「彼女なら・・・・ほら、」

そう言つて俺は指をした

「リカ――――！」

ボヨン！ ボヨン！

大きな双子山を揺らしながら友達の名前を呼んだ静香先生

「静香！ 無事だつたのね！」

「うん！ 私はなんとか、リカの方は大丈夫？」

「ええ、私はなんとか・・・・でも、空港はもう駄目よ。奴らでいっぱいになつた」

そう言つて田島さんが付け加える

「俺達は何か脱出したんだが、あつちは手が付けられなくてな。  
だから、警察署に戻ってきたわけだ」

「わかったんですか。でも、生き残りがいて良かった

「ああ、こちもベックリしたが良かったよ。それにしても……。  
・

「？？」

「わかったのだね！」

「こねは、どうやって手に入れた？」

セツコはストライカーを握とした

「ああ、これですか？俺の私物ですよ」

「え？」「

リカさんと田畠さんの声がハモった

「どうして？」

ヒロカさん質問してきた

「こや～ネットとかで全部落としたんですよ。」

いや～落とした時は最高だったな～誰も手、上げないんだもん

「ほへつ、そいつはす」こな

「それより、警察署の方には誰か生き残りはいましたか？」

俺が質問した

「いや、俺達もさつき着いたばかりでな。まだ、中を確認してないんだよ」

と田島さんが答えた

「そうですか。じゃあちょっと手伝つてもうれますか？友達の親がここにいる署員なんですよ」

「そうね。私たちも弾薬は補給したいから一緒に行くわ。とりあえず、中に入つたら？」

ガラガラ

そう言つて鉄門を開けてくれた

「分かりました。」

そう言つて俺達は警察署に入った

（警察署の駐車場）

俺は、皆に南リカさんと田島さんを紹介した。それぞれ簡単な自己紹介をして、ブリーフィングに入った

進行は孝だ。

なんで、俺がやらないかって？面倒臭いからだ！

というか、リーダー的な素質はないからな～昔つか  
あれ？前にも言つた気がする・・・・・・まあいいか

「それじゃあ、一階を島田さん・田丸さん・の二人。二階に麗と僕・  
あさみさん・コータの四人。地下駐車場に田島さん・リカさん・大  
和・冴子さんの四人だ」

と孝が配置場所を言つていく

「小室、私とかは？」

「沙耶はここに残つてそれぞれの報告を聞いてくれ。石井と京さん、  
ありすちゃん、静香先生もここに残つてください。」

「「「「わかった(わ)」」」

「よし、行くぞ！」

孝達が行動を開始した。

「さて、俺達も行くかね？リカ」

「ええ、二人とも付いて来て」

「「分かりました」」

やつらつて地下駐車場に向かつた

（孝 side）

僕たちは麗の親父さんがいる一階の刑事課に向かつた

「孝」

麗が声を掛けってきた

「なんだ？」

「もし、お父さんが奴らになつた時は……」

「言ひな。まだ希望を捨てちゃあいけない」

どんなときだつてそうだ、希望を捨ててはいけない

「…………そうね。あつがとつ、孝」

「氣にするな」

（一階、刑事課）

「酷いな……」

「ええ、」

「ええ、今までなんて」

「確かに・・・」

二階に着いた四人は刑事課の惨状を見て臆した

いたるところに血が飛び跳ねていたり、死体がそのまま残されたのだから

僕たちは慎重に奥へと進んだ。

辺りを捜索したが、中々麗の親父さんが見つからない。ビニに行つたのだろうか？

結局、刑事課の部屋、すべてを見回つたがビニにもいなかつた。

しばらくしてコータ達も戻ってきた。

僕は「一タに聞いた

「どうだつた？」

「ビニにもいないね。死体とかも調べたけどそれらしい人はいなかつた」

ということはあの電話の後、ここから脱出したというわけか？それとも・・・・

警察署（後書き）

麗の親父さん行方不明！！

さて、どこに行つたのでしょうか？

## 地下駐車場

「地下駐車場」

俺と冴子、リカさん・田島さんの四人で地下駐車場に来ていた

「思ったより広いな」

と俺が感想を述べた

「JJIJは前は美術館で市が買い取った物を警察署に組み替えたらしい。JJIJも、その名残という訳だ」

と田島さんが説明してくれた

「どうか、どこのバイオだよ。警察署が美術館だったなんてどっかに仕掛けでもあるんじゃねーか？」

「とりあえず、手分けして捜索してみましょ」

とリカさんが提案してきた

「そうですね。二人一組で捜索して、何か見つけた時は無線で連絡して下さい」

と俺が言つ

「分かったわ。じゃあ私たちはJJIJの方を捜索してみるわ。行くわよ田島」

「へいへい」

と言つて西側の駐車場を調べてくれる」となつた。俺達は東側である

（東側地下駐車場）

「なあ大和」

冴子が話しかけてくる

「なんだ？ 冴子」

「（）の先はどうするのだ？」

「つて言つと孝のお袋さんとか麗の親父さんを捜索した後つてことか？」

「ああ」

「やうだな、俺的には電気が生きている所を探し出して、そこで暮らすことになるかな」でも、自衛隊とかが生きていたらそこに避難することかな？」

「でも、そう言つ所は厳しくなるんじゃないのか？」

「ああ、それは第一の目標だがそれが出来なかつた場合のつきの事だ」

「どこか探し出して、そこで暮らすことになるか……だが、そんな所はあるのか？」

「探し出して見ないとさすがに分からないな。でも、冴子と一緒にいるから何処だつていいんだがな」

「や、大和／／／」

冴子は照れた

「可愛いな～」

とその時！

「大和君、聞こえる？」

無線の相手はリカさんだ

「どうしました？」

「ちょっとここに来てくれる？ 気になる」とを見つけたの

「分かりました。ちょっと待って下さー」

「行くぞ。冴子」

「ああ」

そう言って西側駐車場に向かった

（西側駐車場）

「リカさん！」

「大和君、こいつちよ」

と言つたので声のした方向に向かつた

「どうしました？」

「ええ、これを見て頂戴」

そう言つて指をしたものは・・・・・

「血痕？」

「ああ、しかもまだ、新しい」

「とじつ」とは生存者か！？

「そうかもしれないけど、一応注意しておいて、血はこの先の整備場に続いてるわ」

「分かりました。では行きましょう。一人は武器は持っていますか？」

「ええ、でも弾が少ないわ」

「俺もだ」

「じゃあ、武器をあげましょ」

そう言つてバビロンからモスバーグM500とモモ機関拳銃を出した

「それ、どうから出したの?」

「まあ企業秘密ついことで受け取つてください」

そう言つて武器を渡した

「とりあえず、詮索は無にしてくべよ」

「もう思つてくれてありがたいです」

「じゃあ行くわよ」

「「「応」」」

そう言つて整備場に突入した

（整備場）

俺達は整備場に突入して驚いた

「「「これは・・・・」」

田島さんが驚きながら言つた

一日普通に思えたが、整備場の真ん中で一人の男が倒れていた。片

手に紙を持って・・・

「生存者がここで息を引き取ったのか・・・」

俺達は死体に黙祷した

「調べてみよ!」

俺が言った

「そうね、何か分かるかもしねい」

そう言つて死体を調べ始めた

（数分後）

「ーーーれは！」

「どうしたのだ？大和」

「どうして、その二人を？」

「冴子、すぐに麗と孝を呼んできてくれ」

「（）の死体は・・・・・・麗の親父さんだ・・・・」

「ーーーーーー 分かった」

その後、すぐに麗達が駆け付けた

「お父さん……」

「…………麗か」

麗が駆け付けてきたがすぐに泣き崩れた

「そ・・・そんna・・・・・お父さん・・・・・なんde-?」

「親父さんga」の手紙を持っていた。」

やつ語つて先ほどの手紙を渡した

「・・・・・・・・・・・・・・

麗は黙つて手紙を読んだ

その間に孝に語つ

「孝」

「なんだ?」

「この町から出てゆく。ここは・・・・・・悲しみがあるの

やつ語つて麗の方を見た

「ああ」

「お父さん・・・・・今まであつがとつ」

麗は親父さんとの最後の別れをしたみたいだ。そして孝の方に歩み寄った

「孝」

「麗、この町からは出よい。悲しみが多くある」

「ええ、やうね」

そう言って表の駐車場に向かった

「俺達も行こい」

田嶋わんが言ひ

「ええ、やうですね」

やつて地下駐車場を出た

（表の駐車場）

俺達は元の駐車場に集合したが田丸さんと島田さんが戻っていないことに気が付いた

「田丸さんと島田さんは？」

沙耶に聞いた

「まだ、戻ってきてないわ。どうしたのかしら？」

そう言つていると警察署から・・・・・

ダアン！

「 「 「 「 「 「 ……」 「 「 「 「 「

一発の銃声が聞こえた

「行け！」

俺が叫ぶ

「 「 「 「 「 「 応…」 「 「 「 「 「

そいつ言つて突入した

一発の銃声…………そして、別れ

ダアン！

その一発の銃声が静かな街に響いた。

そして、俺が声をかける

「行くぞー！」

「　　応ー！」

そう叫んで、俺、孝、コータ、田嶋さんが動いた

→警察署一階へ

俺達は島田さんと田丸さんがいる一階に突入した。そこで見たものは・・・・・

「　　なつー？」

俺達が見たものは大量の奴らが群がっていた

「クソッ！…ビリしてこんなにいるんだ、さつきまでいなかつたのにー！」

と孝が叫ぶ

「今はそんなことを言つてもしょうがない。とにかく島田さんと田

丸さんを探すんだ！！」

そう言ってバビロンからガトリング砲を取り出した

キュイイイン

ドルルルルル

アアアアアア

多くの奴らが碎け散つた

「よし、コータこいつを使って援護射撃をしてくれー！」

そう言って即座に援護射撃を開始した

「これは、ナイツＳＲ25！！OK！！」

そう言って即座に援護射撃を開始した

ダーンー！ダーンー！ダーンー！

「よし、コータが援護しているうちに一人を捜すぞ」

「「応！」」

そう言って大群の奴らに突っ込んだ。と言つてもさつきの攻撃でほとんどは細切れになつていてるため動きやすくなつている

俺と孝と田島さんはくつづいてそれぞれの援護を行つた

「ダーン！ダーン！ダーン！

「ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！

「ダーン！ダーン！ダーン！

「田丸さん、島田さん、どうですか？」

と大声で呼んでもらふと……

「うわあだ！」

声のする方を見てみると田丸さんが大きなロッカーの上にいた  
しかし、そこにいたのは田丸さんだけだった

「大丈夫ですか！？」

と孝が声をかける

「ああ、大丈夫だ！だけど、島田が……」

この時、察した島田さんは奴らの餌食になつたことを……

「とにかく！」を出よひ。こんなに音を出しているんだ外から来る  
かも知れん

俺が言った

「そうだな、外の連中も心配だ」

と田島さんも賛成した

そして、コータのところまで戻ってきた

「田丸さん、無事だつたんですねー。」

「応！なんとかな前らが来てくれなかつたら奴らの仲間入りして  
いた」

と再開を喜んだその時！！

卷之三

「...」

外から機関砲の銃撃音が聞こえた

行こう!!

孝が叫ぶ

そして、外に出てみると……

アアアアアアア

大量の奴らがいた

「クソッ……」れじやあどりもなりん……」

田島さんが言つ

「 もうここから脱出しよう。皆一それぞれの車両に乗るんだ！」

俺が指示をする

そして、それぞれの車両に乗った。

俺もストライカーに乗った

「 大和！無事か？」

「 ああ、冴子、大丈夫だ。よし、しっかり掴まつてろ！…」

ブオオオオオ！…！…！

そう言つて先陣を切つた

「 齒あ食いしばれよ！…」

そう言つて奴らに突つ込んだ！

ドカー！グシャー！ドカー！グシャー！

嫌な音が車内に響いてるがもう慣れたことだ

そして、なんとか奴らの群れから逃げ出すことができた

（ストライカー車内）

「ふう～」

危機を通り過ぎたことによりため息をついた

「男子がため息とはかつて悪いよ」

「なんこと言つても、しょうがないだろ～危機が過ぎたんだから」

「それもそつか。お帰り大和」

「ただいま、冴子」

そう言つてキスした

「孝だ。大和、聞こえるか？」

「ああ、もう！いいとこだつたのに邪魔をしてくれたな小室君」

俺は無線機をとつた

「どうした？孝」

「ここの先がお袋のいる御別小学校だ。そこに向おう」

「分かった。じゃあお前らのハンヴィーが先頭に立つてくれ

「分かった」

そう言つたあとハンヴィーが出てきた

残りは孝のお袋さんだけか、生き残つてゐるといいな  
俺達は仲間を失つた。しかし、挫けてゐる場合ぢやない。俺達は先  
に進まないと死んでいつた奴らの分もしつかりとな・・・・

一発の銃声・・・・・そして、別れ（後書き）

ついに、最終局面にたどり着くか！？

## 床主市小学校

俺達は警察署を脱出した後、孝のお袋さんがいる床主小学校を田指していた

それで、俺は無線で孝に今後の事について話し合ひつゝとした

～ストライカー 内部～

「孝、この後の事はどうする?」

「「」の後の事つて?」

「お前のお袋さんがいるにしきれないにしき、どの道出発しなきゃならん。その事についてだ」

「・・・・学校を脱出した後は、港に向かつて使えそうな船があるかどうか探して、あつたらそのまま脱出、なかつた場合は、このまま車列を組んで車で床主市を出る」

「そうか、分かった。」

そう言つて、無線を切つた

すると、冴子が話しかけてきた

「小室君はなんて?」

「小学校を出た後は港に行つて船を搜す。なかつたら「」のまま車で

出ぬやうだ

「やうか。見つかるといいね。」

「ああ、俺もそれは願つてゐ事だよ」

いくら、他人の親と言えどこの時世だ。生き残つてくれた方が嬉しいに決まつてゐる。だが、生存の確率は低い。なぜなら、彼の親も学校の先生だ藤見学園がああなつたら小学校なんざもつとひどい事になつてゐかも知れない

そつ思いながら、俺らは小学校へと走らせて行つた

（床主小学校）

數十分して小学校に着いた。

中は悲惨な状況だつた。いたるとこに死体は溢れ、また、奴ら化した小学生が多数いたからだ

俺達は門前でそれを見ていた

「ひでえな

俺が言つた

「ああ、お袋、無事だといいな

小室が答える

「ま、孝一そんな暗い顔しないの…ちゃんと希望を持つて、ね？」

麗が孝の事を励ます

「ああ、眞二が最後の我儘だ。最後まで頼むー。」

そつ言つてお辞儀した

「なーに、言つてんだ孝。仲間が困つてる時、助けてやらねばなら  
する?」

俺が言つ

「やうだぞ。小室君、ここまで来れたのも君のおかげだ。その恩返  
しと思つてくれ」

冴子が言つ

「やうだよ。小室、そんな辛氣臭い顔しないでさ。明るく行いつよ  
ー。」

「一タが言つ

「孝の兄ちゃん無理してる?」

あつすが言つ

「外は怖いけど、眞と分かれるのはもつと嫌よ~」

静香先生が言つ

「孝ーー！」

麗が言つ

「みんな・・・・・ありがとーー！」

孝が涙を流しながら言つた

「それじゃあ、いつちよ派手に行きますか！－！」

俺がそう言つてバビロンから四連装ロケットランチャーを出した

「f i r e ! !

バシュ！！

ドカーーーン！！

そう言つて俺達は小学校に突っ込んだ

（小学校内部）

俺達は突入に成功し無事に小学校に入る事ができた

「さて、このまま団体で動くのは効率が悪い、だから分かれて動いた方がいいと思うのだが、孝、どうする？」

俺が提案を出す

「やつだな。一階を田島さん・リカさん・田丸さんの三人で、二階は僕・麗・リータの三人、三階が大和、汎子さんの二人、残りは車両に残つてくれ」

「…………応……」

そう言って俺らは行動を開始した

（三階）

俺と汎子は三階に移動して小室のお袋さんを探すことになった

ガラッ

「うーん、いねえな」

さつきから、教室を中心に捜索していた

「やつだね、小室君の母上はこの階にはいないのかも知れないね」

「やつだな、他の部屋も調べてみよう」

「やつだね」

そう言って他の部屋にも行ってみたが、孝のお袋さんはいなかつた。  
仕方なかつたので二階に行つてみた

（二階）

「孝、応答してくれ」

「どうした? 大和」

「三階を捜索したがそれしき人物はいなかつた。だから、お前らと合流するよ」

「分かつた。どこの辺に居るか分かるか?」

「えへと音楽室の付近の階段に居る」

「分かつた。すぐ行くよ」

そう言つて無線を切つた

数分後、小笠達と合流した

そして、そのまま職員室に向かつた

～職員室前～

職員室の前には多数の奴らがいたしかし、ほとんどが子供だった

「うへんやつぱり大人がいないな」

俺が言つ

「やつだな。お袋はどこの辺に居るんだろ?」

孝が心配やつて言つ

「しゃーない」ひは俺と冴子で止づけるから、小室達は職員室の中を調べてくれ

そう言ってバビロンからM16A2を出した

「分かった。気お付けろよ

「そつちもな

そう言ってそれぞれの役割を果たすために動いた

「そへら、子供だからって容赦しねえぞ！」

ダダン！ダダン！ダダン！

アアアアアア

二~三体奴らを連続で倒した

「ハア！～

ズバツ！ズバツ！

アアアア

冴子の方も順調に倒していく

そして・・・・・

「ふう～終わったな。冴子

「ああ、そのようだな」

「それにしても、遅いな孝達。」

「そうだね。見に行つてみるかい?」

「そうだな。報告も兼ねていくか」

中に入らうとした時だった

ダン!

「 「 」 」

中から銃声が聞こえた

「孝! -! -! 」

急いで中に入つてみると・・・・・・

孝の前に一體の死体があつた

「孝、それは」

「ああ、お袋だつた・・・・・もう、手遅れだつたよ・・・・・・

涙を流しながら言った

「そりが、残念だつたな。」

俺にはそれしか言えない。

「…………ああ」

「じゃあ、俺と冴子は一階に戻つて皆に伝えてくれる。決心がついた  
ら来てくれ」

「…………ああ」

そう言つて俺と冴子は職員室を出た

「残念だつたな。」

「ああ」

その後は無言が続いた

そして、俺らは一階に戻つて皆に伝えた。

一階で留まつていると孝達が戻ってきた

「…………」

孝は黙つたまんまだ

仕方ない事か、身内が死んでしまつたのだからな

「孝、もう後悔しないくらい泣いたか？」

「…………あ、大丈夫だ。既、行こう

そう言つて俺らはそれぞれの車両に乗り込んで学校を後にした

この先、世界はどのように変わっていくのか。最悪の場合、俺達人類が滅びるかもしれない。

だつたら、その運命に抗つてやるつじやねえか。俺の命死さるまで・  
・・・

床主市小学校（後書き）

はい、これにて、第一弾学園黙示録は終了します。

今まで、読んで下さった方々本当に、ありがとうございます。

今、第一弾学園黙示録も書いていますので、そちらも読んでいただければ幸いです。

では、失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6787o/>

学園默示録～転生者～

2010年12月13日22時46分発行